

第49回日本神経精神薬理学会
第29回日本臨床精神神経薬理学会
合同プログラム

会長招待講演

JSNP/JSCNP 会長招待講演

10月12日(土) 13:40～14:40 第13会場(501)

座長：宮田 久嗣 東京慈恵会医科大学精神医学講座
吉村 玲児 産業医科大学精神医学教室

IL

生物学からみた精神疾患の病理

神庭 重信 九州大学名誉教授／日本うつ病センター理事長／飯田病院顧問

合同シンポジウム

JSNP/JSCNP 合同シンポジウム1

10月12日(土) 8:40 ~ 10:20 第3会場(413+414)

不安症・強迫症の診療ガイドライン

Clinical practice guideline for anxiety and obsessive-compulsive disorders

オーガナイザー・座長：井上 猛 東京医科大学精神医学分野
座長：清水 栄司 千葉大学大学院医学研究院認知行動生理学

我が国ではこれまで学会が発表する診療ガイドラインはなく、標準的な治療を専門医のみならず患者、家族、一般医に示すことができなかった。しかし、国による承認薬の違い、精神療法の普及の違いもあることから、我が国の実状にあった診療ガイドラインの作成は必要なことである。2018年から日本不安症学会と日本神経精神薬理学会は合同で、不安症、強迫症の薬物療法、精神療法に関する診療ガイドラインを作成している。まず、パニック症、社交不安症、強迫症の3疾患を対象として診療ガイドライン案を2019年3月に発表する予定である。本シンポジウムでは、パニック症、社交不安症、強迫症の診療ガイドライン案を3名のシンポジストが発表する。さらに現在診療ガイドライン作成を計画中の全般不安症の日本における診療ガイドラインについても、国外の診療ガイドラインを参考に考えてみたい。

JS1-1 パニック症の診療ガイドライン

塩入 俊樹 岐阜大学大学院医学系研究科精神病理学分野

JS1-2 強迫症の治療ガイドライン

松永 寿人 兵庫医科大学精神科神経科学講座

JS1-3 社交不安症の診療ガイドライン

朝倉 聡 北海道大学保健センター・大学院医学研究院精神医学教室

JS1-4 全般不安症の診療ガイドライン

大坪 天平 東京女子医科大学東医療センター精神科

合同

シン
ポ
ジ
ウ
ム

難治性強迫症に対する治療の最前線とこれから～薬物療法を中心に～

The cutting-edge and future direction of therapeutic intervention for treatment refractory OCD

オーガナイザー・座長：松永 寿人 兵庫医科大学精神科神経科学講座
座長：中尾 智博 九州大学大学院医学研究院精神病態医学

強迫症(obsessive-compulsive disorder; OCD)は、一般人口中の有病率が1-2%とされるなど、少なからず出現する精神疾患である。この治療では、SSRIなどの薬物、そして認知行動療法(CBT)の有効性が確立されているものの、その寛解率は10年で50%程度と十分とはいえない。特にSSRIに対する抵抗性には、初発年齢や罹病期間、強迫症状のタイプやコモビデティといった症候学的・精神病理学的特徴など、様々な要因が関与する。最近では未治療期間が長期化することによる神経可塑的な変化が注目され、OCDが長期化・習慣化した患者への対応が検討されている。

本シンポジウムでは、OCD難治例の臨床特徴をまずは整理し、薬物療法を中心に、neuromodulationやCBTなどの応用について、治療的介入の最前線やこれからについて紹介し、議論を深めたいと考えている。各演者は、OCDの臨床のみならず、脳内メカニズムにも精通したspecialistであり、今日的生物学的理解に基づいた新たな治療戦略の提言も併せて行う予定である。

JS2-1 強迫症(OCD)の難治性に対する今日的理解～その横断的・縦断的特性を中心に～

松永 寿人 兵庫医科大学精神科神経科学講座

JS2-2 難治性OCDに対する薬物療法～その現在とこれから～

中尾 智博 九州大学大学院医学研究院精神病態医学

JS2-3 難治性強迫症に対するニューロモデュレーションの現在とこれから
～薬物療法との関連性を含めて～

中前 貴 京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学

JS2-4 難治性OCDに対する認知行動療法の現在とこれから～薬物療法との関連～

向井馨一郎 兵庫医科大学精神科神経科学講座

精神疾患のバイオタイプの過去・現在・未来への展望

Biotype of psychiatric disorders: past, present and future perspective

オーガナイザー・座長：橋本 亮太 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部
座長：加藤 忠史 理化学研究所脳科学総合研究センター精神疾患動態研究チーム

バイオタイプとは、精神疾患の生物学的な分類のことである。従来の診断法にとらわれずに、患者の測定データ等に基づいて分類を行う。よって、従来診断における症状評価による治療効果の判定法とは異なる治療効果判定法が必要となる。近年は、特定の仮説に基づかずに、機械学習等の手法を用いて得られた分類研究が盛んであるが、このバイオタイプが精神疾患の新たな診断そして診断体系まで発展するには、まだ道半ばである。このバイオタイプの考え方は、アメリカのNIHが提唱したRDoCの考え方に近く、従来診断にとどまらず疾患横断的なものになる。しかし、ただ分類するだけでは最終的な治療に結び付かず、分類した後の治療効果判定を精神疾患横断的に行う必要があり、そのためには、共通の治療評価判定指標の開発が必要である。本シンポジウムでは、このバイオタイプ研究を俯瞰し、未来への展望について概説する。

JS3-1 精神疾患のバイオタイプ概説

橋本 亮太 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部 /
大阪大学大学院医学系研究科精神医学教室

JS3-2 眼球運動による精神疾患のバイオタイプ分類は可能か

森田健太郎 東京大学大学院医学部附属病院リハビリテーション部

JS3-3 認知機能障害による精神疾患のバイオタイプ分類は可能か

住吉 チカ 福島大学人間発達文化学類人間発達専攻

JS3-4 安静時脳機能結合からみたうつ病のバイオタイプ

岡本 泰昌 広島大学精神神経医科学

合同ワークショップ

JSNP/JSCNP 合同ワークショップ

10月12日(土) 8:40 ~ 10:20 第2会場(411+412)

特定臨床法ワークショップ

Workshop focused on Clinical Trials Act

オーガナイザー：古郡 規雄 獨協医科大学精神神経医学講座
座長：中込 和幸 国立精神・神経医療研究センター
下田 和孝 獨協医科大学精神神経医学講座

特定臨床法が2018年4月1日から施行され、今後臨床研究の在り方が大きく変わると予想される。それに伴い、学会の在り方も変わる可能性がある。

煩雑な作業であるため敬遠する動きが多いと聞かすが、具体的にどのような問題があるのかよくわからないことが多い。人を対象とする医学系研究に関する倫理指針による倫理委員会から認定臨床研究審査委員会での承認を受けることとはどういう作業なのか、実際に特定臨床研究を計画実行するには、以前より数倍の事務手続きが必要になるのは本当なのか、また認定臨床研究審査委員会とは何を審査するところなのか、特定臨床法を実施するうえで留意しなければならないことは何なのかよくわからない。そこで今回は、特定臨床法に携わった人たちから生の声を聴く機会を設け、今後の研究に対する道しるべになれば幸いである。

JW-1

臨床研究法下での「被験者保護」の一年

井上 悠輔 東京大学医科学研究所公共政策研究分野

JW-2

単科精神科病院で臨床研究を立ち上げること
～臨床研究法下での『特定臨床研究』へのハードル～

樽谷精一郎 大阪精神医学研究所新阿武山病院

JW-3

国立精神・神経医療研究センターにおける特定臨床研究の審査や実施の状況

清水 玲子 国立精神・神経医療研究センタートランスレーショナル・メディカルセンター

JW-4

当院での臨床治験・研究への取り組みと臨床治験法施行後の課題

渡部 芳徳 医療法人社団慈泉会市ヶ谷ひもろぎクリニック / 医療法人社団慈泉会南湖こころのクリニック / 医療法人社団慈泉会ホヅミひもろぎクリニック

合同

ワ
ー
ク
シ
ョ
ウ
プ
特
定
臨
床
法

統合失調症薬物治療ガイドライン講習会

統合失調症薬物治療ガイドライン講習会

10月13日(日) 8:40 ~ 16:30 第3会場(413+414)

司会：稲田 健 東京女子医科大学医学部精神医学講座
橋本 亮太 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部

日本神経精神薬理学会及び日本臨床精神神経薬理学会では、ガイドラインの普及・教育・検証活動として、EGUIDEプロジェクトを支援しています。EGUIDEプロジェクトでは、ガイドラインの講習を行い、精神科医の処方行動の変化を検討する研究を行っています。本講習は、講義とグループディスカッションからなるもので受講には研究参加が必須となるため、誰でも参加できるものではありませんでした。そこで、研究参加しなくても受講できる講習を本大会にて開催することにいたしました。本講習は、統合失調症薬物治療ガイドラインに記載されている内容の周知だけでなく、記載されていないもの大切な問題についても紹介し、参加者が統合失調症について知識をより深めるものになることを目的としています。精神科医はもちろんのこと、コメディカルの医療従事者や基礎研究者や製薬企業の関係者など興味ある方は、広く受講していただきたいと考えております。

講義内容：

SG1 序文	稲田 健	東京女子医科大学医学部精神医学講座
SG2 初発精神病性障害	松井 佑樹	医療法人明心会仁大病院
SG3 再発・再燃時	堀 輝	産業医科大学医学部精神医学教室
SG4 維持期治療	山田 恒	兵庫医科大学精神科神経科学講座
SG5 治療抵抗性	橋本 亮太	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 精神疾患病態研究部
SG6 その他の臨床的諸問題	橋本 直樹	北海道大学大学院医学研究院精神医学教室

症例グループディスカッションファシリテーター：

市橋 香代	東京大学医学部精神神経科学
山田 浩樹	昭和大学医学部精神医学講座
水野謙太郎	社会医療法人如月会若草病院
越智紳一郎	愛媛大学大学院医学系研究科精神神経科学
阿竹 聖和	産業医科大学医学部精神医学教室
福本健太郎	岩手医科大学医学部神経精神科学講座

合同

統合失調症薬物治療
ガイドライン講習会

第29回日本臨床精神神経薬理学会
プログラム

特別講演

特別講演

10月11日(金) 15:20 ~ 16:20 第13会場(501)

座長：近藤 毅 琉球大学大学院医学研究科精神病態医学講座

SL

精神科薬物治療のこれまでの到達点と解決すべき課題

染矢 俊幸 新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野

会長招待講演

会長招待講演

10月11日(金) 16:30 ~ 18:10 第1会場(メインホール)

座長：吉村 玲児 産業医科大学精神医学教室

IL-1

Dimensional Treatment of Bipolar Disorder

Andrea Fagiolini Professor of Psychiatry and Chairman, Chief of Medical Services, and Residency Training Director of the Department of Mental Health and Division of Psychiatry, University of Siena School of Medicine, Italy

IL-2

Brain-in-Flame: effects of neuroinflammation on cognitive function across psychiatric disorders

Bernhard T. Baune Department of Psychiatry and Psychotherapy, University of Münster, Münster, Germany,
Department of Psychiatry, Melbourne Medical School, The University of Melbourne, Melbourne, Australia,
The Florey Institute of Neuroscience and Mental Health, The University of Melbourne

JSCNP

会長招待講演

第19回臨床精神神経薬理学セミナー

第19回臨床精神神経薬理学セミナー

10月12日(土) 10:30～12:10 第2会場(411+412)

日本臨床精神神経薬理学会 第19回臨床精神神経薬理学セミナー

オーガナイザー：下田 和孝 獨協医科大学精神神経医学講座
司会：渡邊衡一郎 杏林大学医学部精神神経科学教室
鈴木 利人 順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院メンタルクリニック

日本臨床精神神経薬理学会専門医制度委員会は、臨床精神神経薬理学に関する優れた学識と高度の技術および倫理観を備えた臨床精神神経薬理学専門医を養成し、良質の医療を提供することを目的に、「臨床薬理セミナー」を開催してまいりました。第19回となる今回は、「統合失調症」、「不安障害」、および「アルコール依存」がテーマです。

専門医申請及び更新を目指す医師に限らず、生涯学習の一環として受講を希望される会員(当日会員も可)はどなたでもご参加いただけます。受講された方には専門医申請及び更新の際、単位として必要となる受講証が発行されます。奮ってご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

CNS-1 統合失調症治療における抗精神病薬の投与法～ドグマとエビデンス～

竹内 啓善 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

CNS-2 不安症の薬物療法

大坪 天平 東京女子医科大学東医療センター精神科

CNS-3 アルコール依存症の最近の治療の変化

齋藤 利和 幹メンタルクリニック

JSCNP

第19回臨床精神神経薬理学セミナー

臨床試験 - 倫理教育セミナー

臨床試験-倫理教育セミナー

10月12日(土) 14:50 ~ 16:50 第2会場(411+412)

日本臨床精神神経薬理学会 臨床試験-倫理教育セミナー

オーガナイザー・司会：井上 猛 東京医科大学精神医学分野

日本臨床精神神経薬理学会は、精神神経用剤(向精神薬)の臨床試験を適正に実施するために必要な基礎知識の普及を目的として、本セミナーを開催してまいりました。

本セミナーでは、まず加藤先生に「RCTの立案・実践・論文化」について、先生のGUNDAM研究などのRCTをベースとした薬理遺伝研究を例に、具体的な実施方法についてご講演いただきます。ついで、そのような臨床研究を行う際に、最近制定された臨床研究法をどのように運用していくとよいのかについて、小笠原先生に「臨床研究法の概要と運用上の問題点」というテーマでご講演いただきます。臨床研究法にもとづいて、学会発表や臨床研究をどのような手続で行うとよいのか、具体的な手続、必要な手続・条件などについてご解説いただきます。これらがわからないため、学会発表や論文発表が最近著しく低調となっています。学会で症例報告やケースシリーズ、RCTを発表しようとする、どのような承認をクリアする必要があるのかなど、本セミナーで理解を深めていただきます。

なお、「治験登録医」、「創薬・育薬認定師」は平成30年度定時評議員総会・会員総会において廃止が決定され、平成31年4月23日本学会ホームページでもお知らせしました。旧「治験登録医」、「創薬・育薬認定師」の資格をお持ちの会員は平成31年度～35年度の期間、臨床試験-倫理教育セミナーを無料で受講できます。

CLETS-1 RCTの立案・実践・論文化；その臨床疑問を解決しましょう

加藤 正樹 関西医科大学医学部医学科精神神経科学講座

CLETS-2 臨床研究法の概要と運用上の問題点

小笠原一能 名古屋大学大学院医学系研究科精神医療学寄附講座

JSCNP

臨床試験・倫理教育
セミナー

シンポジウム

シンポジウム1

10月11日(金) 8:20 ~ 10:20 第2会場(411+412)

産業精神薬理学2019

Occupational psychopharmacology in 2019

オーガナイザー・座長：吉村 玲児 産業医科大学医学部精神医学教室
座長：新開 隆弘 産業医科大学医学部精神医学教室

向精神薬を服用しながら仕事をしている人は多い。昨今精神科薬物療法に関するエビデンスやガイドラインがいくつも報告されている。しかし、実際の患者さんを目の前にした場合、そのガイドラインに示されている結果を適応することが果たして妥当であるのか迷うことが多い。もちろん、論文やガイドラインが照準を定めている対象群と自分の患者の類似や相違点を考えてその治療法適応性の外的妥当性を検討すればよい。しかし、就労中の患者の薬物療法に関する知見は非常に少ないのが現状であるし、患者がどのような仕事をどのくらいの時間行っているのかなどの情報も薬物療法に影響する。従って、仕事に就く、仕事を続けるという観点から薬物療法を再考察する必要がある。本シンポジウムでは、就労や産業医学から精神疾患の薬物療法を議論したい。

S1-1 職場におけるうつ病の理解と産業医との連携

新開 隆弘 産業医科大学医学部精神医学教室

S1-2 うつ病治療の産業精神薬理学

吉村 玲児 産業医科大学医学部精神医学教室

S1-3 自動車運転に関する産業精神薬理学

岩本 邦弘 名古屋大学大学院医学系研究科発達老年精神医学分野

S1-4 不安障害の産業精神薬理学

池ノ内篤子 産業医科大学医学部精神医学 / 和歌山つくし医療・福祉センター

統合失調症薬物治療ガイドライン改訂版の狙いと範囲

Aims and scope for schizophrenia pharmacotherapy guidelines revised edition

オーガナイザー：古郡 規雄 獨協医科大学精神神経医学講座
 座長：中込 和幸 国立精神・神経医療研究センター
 染矢 俊幸 新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野

精神科薬物療法については、臨床家ごとのばらつきが大きく、よりよい医療を普及させることが必要とされている。抗精神病薬の単剤治療を行うことが海外の各種ガイドラインで推奨されているが、本邦では諸外国と比較して突出して抗精神病薬の多剤投与が多く薬剤数が多い。抗精神病薬の多剤併用率が65%程度であり、抗パーキンソン薬、抗不安薬/睡眠薬、気分安定薬の併用率もそれぞれが30-80%と高い。そして、2014年には、向精神薬の多剤処方に対する診療報酬の減額がなされた。本邦においては、統合失調症の薬物治療ガイドラインが2015年9月に日本神経精神薬理学会より発表された。このガイドラインは、精神科分野においては本邦初のMinds法を用いたエビデンスに基づいたもので、現在CNPとNPが合同で統合失調症薬物治療ガイドライン改訂版が作成されている。本シンポジウムでは各パートの進捗状況を報告する予定である。

S2-1 ガイドラインの臨床現場での位置づけ

橋本 亮太 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部

S2-2 統合失調症薬物治療ガイドライン2020 概要

稲田 健 東京女子医科大学医学部精神医学講座

S2-3 ガイドライン以外の重要な問題

古郡 規雄 獨協医科大学精神神経医学講座

S2-4 基本的臨床疑問(1)

竹内 啓善 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

S2-5 基本的臨床疑問(2)

田近 亜蘭 京都大学医学部附属病院精神科神経科

S2-6 治療抵抗性統合失調症

嶽北 佳輝 関西医科大学精神神経科学教室

S2-7 統合失調症薬物治療ガイドライン改訂版：特殊な病態

三浦 至 福島県立医科大学医学部神経精神医学講座

S2-8 統合失調症薬物治療ガイドラインの改訂を目指して 抗精神病薬の副作用に関する章の方向性

坪井 貴嗣 杏林大学医学部精神神経科学教室

S2-9 統合失調症の睡眠障害に着目した重要臨床課題

高江洲義和 杏林大学医学部精神神経科学教室

S2-10 妊娠中、授乳中の統合失調症女性における抗精神病薬治療

渡邊 央美 独立行政法人医薬品医療機器総合機構医薬品安全対策第一部

最先端技術から期待される近未来精神科治療-リキッドバイオプシー、スマートナノマシン、DNA脱メチル化-
Near-future psychiatric treatment expected from state-of-the-art technology
-Liquid Biopsy, Smart Nanomachine and DNA Demethylation

オーガナイザー・座長：加藤 正樹 関西医科大学医学部医学科精神神経科学講座
座長：馬場 元 順天堂大学大学院医学研究科精神・行動科学

精神疾患における薬物療法は、脳実質のサンプリングが事実上不可能であり、臨床上有用なバイオマーカーが無い点、薬物は脳血液関門を通過する必要があるため高分子なものや遺伝子治療が不可能な点、環境要因が大きく影響しているが、その環境要因と関連するメチル化を修正する方法が明らかになっていない点などが限界である。近年、これら問題点に関する研究が発展し、解決に向かう出口が見えつつある。本シンポジウムは、精神科の今後の薬物療法に希望をもたらす、それら最先端技術の現状と精神科での応用の可能性に関して広く知っていただくのが狙いである。

S3-1

ゲノム領域特異的なDNAメチル化状態の制御と近未来精神科治療への希望

鈴木 治和 国立研究開発法人理化学研究所生命医科学研究センター

S3-2

中枢神経系疾患治療を指向した血液脳関門を効率的に通過するスマートナノマシンの開発

安楽 泰孝 東京大学大学院工学系研究科バイオエンジニアリング専攻 /
川崎市産業振興財団ナノ医療イノベーションセンター

S3-3

脳リキッドバイオプシー(脳由来エクソソーム解析)による精神神経疾患の予防、診断、治療

滝川 修 国立長寿医療研究センター (NCGG) / 日本医療研究開発機構 (AMED)

双極性障害の薬物療法アップデート2019

Update 2019 of pharmacotherapy for bipolar disorders

オーガナイザー・座長：寺尾 岳 大分大学医学部精神神経医学講座
座長：井上 猛 東京医科大学精神医学分野

双極性障害の薬物療法は気分安定薬のみならず、非定型抗精神病薬や新規抗うつ薬によるところが大きい。さらに最近では、光線療法や暗闇療法ないしサングラス療法も注目されている。このようなことから、定期的に新規参入薬物や新規治療法を従来の薬物療法とともに検討し、エビデンスを整理し直し、治療法の内容を再検討する必要性が生じる。このような必要性から2019年度版として、その道の専門家にアップデートをしてもらう。

S4-1

躁病の薬物療法

井上 猛 東京医科大学精神医学分野

S4-2

不安性苦痛と混合性うつ病と双極性

武島 稔 明心会柴田病院 / 東京医科大学精神医学分野

S4-3

うつ病、維持期の薬物療法アップデート

寺尾 岳 大分大学医学部精神神経医学講座

S4-4

双極性障害に対する光線療法と暗闇療法

平川 博文 大分大学医学部精神神経医学講座

各診療科の視点から、てんかんを多角的に評価する
 ～てんかん診療のスキルアップを目指して～

From the viewpoint of each clinical department, we evaluate epilepsy from different angles
 ～ For skill up of the epilepsy medical treatment ～

オーガナイザー・座長：清水 秀明 愛媛大学大学院医学系研究科精神神経科学
 座長：上野 修一 愛媛大学大学院医学系研究科精神神経科学

てんかん診療は、小児科、脳外科、神経内科、精神科の4つの診療科にまたがる疾患である。小児のてんかんは、成人とは異なる特徴的な臨床症状や脳波所見が認められる。また、てんかん発作のコントロールが薬物治療で困難な場合、外科治療の適応を検討することになる。さらに、てんかん発作と見誤りやすい臨床症状を呈する疾患として、失神や心因性非てんかん発作などが挙げられる。このように、てんかん診療の幅は広く、各診療科との連携が不可欠であるが、その多彩な症状から臨床的な評価が難しく、他科へのコンサルトを行うべきか判断に迷うケースも少なくない。今回のシンポジウムでは、各診療科の視点から、てんかんを多角的に評価し、てんかん診療のスキルアップを目指したい。

S5-1

小児てんかんの特徴

重松 秀夫 独立行政法人国立病院機構静岡てんかん・神経医療センター

S5-2

てんかんの外科適応について

近藤 聡彦 独立行政法人国立病院機構静岡てんかん・神経医療センター

S5-3

神経内科の立場から

溝渕 雅広 中村記念病院神経内科・てんかんセンター

S5-4

てんかんと精神症状

西田 拓司 独立行政法人国立病院機構静岡てんかん・神経医療センター

市販後の有効性・安全性評価に関する諸問題

Practical issues on postmarketing evaluation of effectiveness and safety

オーガナイザー・座長：稲垣 中 青山学院大学教育人間科学部 / 青山学院大学保健管理センター
座長：中林 哲夫 独立行政法人医薬品医療機器総合機構

新規医薬品の製造・販売が承認される際には、第I相から第III相に至る一連の市販前臨床試験においてその有効性と安全性が検証される。しかしながら、市販前臨床試験は十分な安全性情報を得る上で十分なサンプルサイズが確保されているとは言い難い上に、対象患者を臨床試験に組み入れるに際してさまざまな選択基準が設けられるため、一般化可能性の面で限界があり、有効性と安全性について未検証の部分が存在する。したがって、新規医薬品の有効性と安全性については市販前臨床試験のみでは不十分であり、市販後もさまざまなルートから得られるデータに基づいて情報を更新してゆく必要がある。

そこで、今回のセッションでは、今後わが国で向精神薬の有効性・安全性評価を行うに際して課題となるであろうトピックから、健康関連QOL評価、メタ解析、レセプトを用いた薬剤疫学研究の3点について議論する。

S6-1 精神科領域における健康関連QOL評価に関する諸問題

能登 真一 新潟医療福祉大学リハビリテーション学部

S6-2 メタ解析を用いた有効性・安全性評価の有用性と限界

岸本泰士郎 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

S6-3 レセプトデータを用いた向精神薬の使用実態の解析

吉村 健佑 千葉大学医学部附属病院次世代医療構想センター

S6-4 リアルワールドデータを活用した医薬品安全性評価と課題

宇山 佳明 独立行政法人医薬品医療機器総合機構

重度かつ慢性の特徴を持つ統合失調症および治療抵抗性統合失調症の治療戦略と将来の医療体制

Treatment strategies for severe and chronic, and treatment resistant schizophrenia, and social and medical changes based on the strategies

オーガナイザー・座長：伊豫 雅臣 千葉大学大学院医学研究院精神医学
座長：岩田 仲生 藤田医科大学医学部精神神経科学講座

我が国では、精神科病床数の多さが問題であり、その中でも社会的入院の多さが目立っている。同時に、重度から慢性状態の統合失調症が、全国で、約8万5000人以上いると推定されている(厚労省研究：安西班)。また、ドーパミン過感受性の問題で、我が国の抗精神病薬の多剤併用、オーバードーズが指摘されており、また、それも治療反応性を悪化させ難治例を、作り出している。ここで我々は、治療抵抗性の、あるいはそうならないための戦略を大まかには、確立して学会から、発表するべきではないのか、統合失調症ガイドラインの改定も控えているが、その中でも、特別な章をさいて、特殊な治療も含めて(ECT,クロザピン、LAI等)、戦略を確立すべきではないかと考える。もし、それらが成功したとした場合、厚労省の試算する、待機患者は、減少し、現在までの古典的な、精神科病院の役割は、変化するであろうし、地域での、精神障害者の生活も、変化していくだろう。上記を考えることは、精神障害者の将来の社会システムを構築していくことと同義だと考えられる。

S7-1 治療抵抗性統合失調症の薬物治療ガイドライン

松井 佑樹 医療法人明心会仁大病院

S7-2 治療抵抗性統合失調症臨床に役立つエビデンス

嶽北 佳輝 関西医科大学精神神経科学教室

S7-3 治療抵抗性統合失調症臨床に役立つロウ・クオリティ・エビデンス

諏訪 太郎 京都大学大学院医学研究科脳病態生理学教室(精神医学)

S7-4 治療抵抗性統合失調症患者におけるドーパミン過感受性精神病について

金原 信久 千葉大学社会精神保健教育研究センター

これからの、抗うつ薬を用いたうつ病治療の展望

Perspectives of future treatment strategies for depressive disorders with new and present antidepressants

オーガナイザー・座長：近藤 毅 琉球大学大学院精神病態医学講座
座長：堀 輝 産業医科大学医学部精神医学教室

日本のうつ病を取り巻く状況は、変遷の一途をたどり、社会的な視点から見ても、現代の社会潮流の流れが大きく影響していると考えざるを得ない。重度の内因性うつ病の減少、メランコリアの軽症化、現代型といわれるうつ病の多様性、社会不安障害及び不安障害がベースになる軽度のうつ病の増加、自己愛性パーソナリティとの表現系としてのうつ病、広汎性発達障害など、このように大いなる多様性に満ちた状態である。ところで、抗うつ薬の進歩もめざましく、SSRI,SNRI,NaSSA,等の新規の薬物療法が1980年代後半から、現在まで大きな流れを作っており、治療における中心的な薬剤となっている。今後、これらの中心的な薬剤は、特許が切れ、おそらく全てがジェネリックに置き換えられ、現在sh上で臨床試験が行われている、全く新規の薬理機序を持った薬剤が、出現してくるのも間もないだろう。一体そういう時代の流れに合って、今後の、本来望ましい薬物療法とは何か。まだ、あまり、確定的な強いエビデンスも出ていない中で、今の時点で、それらをディスカッションすることは有意義ではないかと思われる。

S8-1 うつ病の急性期と再発予防における薬物療法 -単極性と双極性の違い-

三浦 智史 国立病院機構小倉医療センター精神科

S8-2 抗うつ薬治療を再考する -残遺症状や再燃・再発を呈した場合-

中村 敏範 信州大学医学部附属病院精神科

S8-3 勤労者うつ病患者における抗うつ薬の認知機能・社会認知機能改善効果

堀 輝 産業医科大学医学部精神医学教室

S8-4 非内因性うつ病(いわゆる「現代うつ」)および不安障害・発達障害合併例における抗うつ薬治療の意義

加藤 隆弘 九州大学 大学院医学研究院 精神病態医学

指定討論者 寺尾 岳 大分大学医学部精神神経医学講座

発達障害をめぐる周産期の諸問題

Pregnancy and autism spectrum disorder

オーガナイザー・座長：鈴木 利人 順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院メンタルクリニック
座長：内村 直尚 久留米大学医学部神経精神医学講座

近年、精神疾患合併妊婦の割合が増加しており、周産期メンタルヘルスに関する病院機能の充実が求められている。これまで気分障害や統合失調症の妊娠・出産への対応や産後うつ病に対する対策が上げられる機会が多かった一方で、臨床現場では発達障害の母親の妊娠・出産に遭遇することも稀ではない。本シンポジウムで「発達障害と周産期」をキーワードとして、それにかかわるさまざまな課題を提示した。第一に発達障害の母親の妊娠・出産における諸問題を取り上げその課題と対策について議論する。第二に発達障害の母親が内服する治療薬の母体と胎児への影響についてここ数年蓄積されつつあるデータについて紹介する。第三に視点を変えて向精神薬内服中の母親から出生した児の機能奇形、すなわち発達障害出現への影響について考察する。そして最後にこれらの臨床的知見に関わる基礎的研究として、マウスを用いた動物実験のデータを紹介する。

S9-1 ライフステージに応じた発達障がいのある方への支援における妊娠・出産・子育て

山下 洋 九州大学病院子どものこころの診療部

S9-2 発達障害治療薬の母体と胎児への影響

根本 清貴 筑波大学医学医療系精神医学

S9-3 向精神薬による児の機能奇形(発達障害など)への影響

伊藤 賢伸 順天堂大学医学部精神医学講座

S9-4 バルプロ酸を曝露した動物モデルにおける機能奇形とその改善療法

田熊 一敞 大阪大学大学院歯学研究科薬理学教室 / 大阪大学大学院連合小児発達学研究所 / 大阪大学大学院薬学研究科薬物治療学分野

MUSUBI-J研究2019

Message from MUSUBI-J study

オーガナイザー・座長：吉村 玲児 産業医科大学医学部精神医学教室

MUSUBI-J研究は日本臨床精神神経薬理学会と日本精神神経科診療所協会との合同プロジェクトであり現在も進行中である。本プロジェクトの目的は、日本でのリアルワールド精神科薬物療法の実情や患者さんの就労状況などを明らかにすることで、今後の精神科薬物療法に生かすことにある。その結果はすでにいくつかの学会のシンポジウムで発表している。今回の[MUSUBI-J2019]では、これまでの研究結果より未発表データを中心に発表する。

S10-1 双極性障害外来患者における自殺性(suicidality)に関するリスク因子

中川 敦夫 慶應義塾大学病院臨床研究推進センター / 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

**S10-2 双極性障害患者におけるRapid Cycling群 vs 長期寛解群の特徴と1年後の転機
MUSUBI研究より**

加藤 正樹 関西医科大学医学部医学科精神神経科学講座

S10-3 双極性障害外来治療患者の就労状況について—MUSUBI—J研究より—

近野 祐介 産業医科大学医学部精神医学教室

S10-4 双極性障害患者の外来処方薬と患者プロフィール

徳満 敬大 獨協医科大学精神神経医学講座

精神科プレジジョンメディスンとPGx
Precision Medicine and PGx in Psychiatry

オーガナイザー・座長：加藤 正樹 関西医科大学医学部医学科精神神経科学講座
座長：池田 匡志 藤田医科大学医学部精神神経科学

日本の精神科遺伝、薬理遺伝関連研究は世界から遅れをとっており、本学会会員もこのフィールドの現状をキャッチアップ出来ている人は多くないと感じます。

AI技術の発展とともに、臨床精神薬理に大きく関わる分野であり、本学会が日本の中心の一つを担うべく、教育、底上げを継続していきたいと思えます。

S11-1 精神疾患のプレジジョン・メディスン—今できること、できないこと、なすべきこと

高田 篤 横浜市立大学大学院医学研究科遺伝学

**S11-2 プレジジョン・メディスンに向けた精神科薬理遺伝の現状
～研究成果と臨床とのギャップ**

池田 匡志 藤田医科大学医学部精神神経科学

S11-3 プレジジョン・メディスンに向けた精神科薬理遺伝の現状

吉田 和生 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室 /
Pharmacogenetics Research Clinic, Centre for Addiction and Mental Health

指定発言 加藤 正樹 関西医科大学医学部医学科精神神経科学講座

プラセボ反応をどう理解し、どのように克服するのか
How do you understand and overcome a placebo response?

オーガナイザー・座長：古郡 規雄 獨協医科大学精神神経医学講座
座長：内田 裕之 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

本来、薬物としての効果はない錠剤などを「特別の効果をもつ薬である」と伝えて被験者に与えると、暗示的な作用が働いて、説明された通りの効果が得られることがある。このような効果をプラセボ効果と呼び、その偽薬を“プラセボ(Placebo)”と呼んでいる。新薬の臨床試験では、プラセボ群に対してその効果を評価することにより、科学的に薬の効力を証明することが行われている。これまでの臨床試験ではプラセボ投与群における治療反応率が高いため、実薬で有意差が得られず、世に出てこなかった薬物が多い。プラセボ効果は、臨床試験において薬効の正確な評価を行う上での妨げになることから、長い間厄介者扱いされてきた。しかしながら患者側から見れば治療効果を得たことに変わりない。プラセボ反応とは何なのか、また、プラセボ反応する予測因子はあるのか、さらにはこのプラセボ反応を臨床にどのように応用するべきなのかを議論していきたい。

S12-1 抗精神病薬の臨床試験におけるプラセボ反応の歴史

久保 馨彦 鶴が丘ガーデンホスピタル

S12-2 統合失調症患者のプラセボ反応を予測する

熊谷 迪亮 川崎市立川崎病院 精神科

S12-3 精神疾患罹患者自身のプラセボ対照比較試験に対する姿勢

菅原 典夫 獨協医科大学精神神経医学講座

S12-4 1990年代以降、抗うつ剤臨床試験におけるプラセボ反応率は変化していない

古川 壽亮 京都大学大学院医学研究科健康増進・行動学分野

過感受性精神病と治療抵抗性統合失調症、そして遅発性ジスキネジアとの関係

The relationship between supersensitivity psychosis, treatment resistant schizophrenia, and tardive dyskinesia

オーガナイザー・座長：渡邊衡一郎 杏林大学医学部精神神経科学教室

1970年代にChouinardによって提唱された「ドパミン過感受性精神病」がここ数年注目され、我々が日常臨床で対応に難渋する治療抵抗性統合失調症例、減薬・中断、あるいは変薬時の精神病症状の増悪、さらには遅発性ジスキネジアまでもが、この概念で説明可能とされている。

本シンポジウムでは、改めてこの概念に注目し、この概念に再び焦点を当てられた千葉大学伊豫教授を初めとして、ドパミン関連研究における我が国の第一人者達に集まっていただき、様々な角度からこの概念を検証することとした。

S13-1 ドパミン過感受性精神病の概念、治療抵抗性統合失調症との関係

伊豫 雅臣 千葉大学大学院医学研究院精神医学 / 社会精神保健教育研究センター

S13-2 治療抵抗性統合失調症におけるドパミン過感受性精神病の病態

小田 靖典 千葉大学大学院医学研究院精神医学教室

S13-3 遅発性ジスキネジアと過感受性精神病

竹内 啓善 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

S13-4 ドパミンD2受容体の間歇的な遮断は“ドパミン過感受性”予防に良い？

内田 裕之 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

クロザピンのTDMの現状と今後の課題

Current status and future issues of TDM for clozapine

オーガナイザー・座長：菊池 結花 秋田大学医学部神経運動器学講座精神科学分野
座長：稲田 健 東京女子医科大学医学部精神医学講座

Clozapine (CLZ) は治療抵抗性統合失調症患者にとって唯一残された薬物治療上の選択肢である。海外のガイドラインにおいては生化学検査にあわせてCLZ服用時にTDMを行うことが推奨されており、その推奨ランクは最も高いAランクである。しかし、日本においてはCLZ血中濃度に関する情報が不足しており、薬物動態学-薬力学 (PK-PD) 理論に基づく投与設計が臨床においてほとんど展開されていないのが現状である。したがって、CLZをより有効に使用するためにTDMを積極的に実施し、PK-PD理論を考慮した個別化投与設計を確立することが重要と考える。本シンポジウムではクロザピンのTDMの現状について紹介し、さらに将来的に集積したデータをもとに、クロザピンが特定薬剤治療管理料の算定薬物となることを目標とした今後の展望についても述べたい。

S14-1 クロザピン血中濃度測定法の開発と臨床応用

赤嶺由美子 秋田大学医学部附属病院薬剤部

S14-2 クロザピン血中濃度が1000ng/ml以上の高値を示した治療抵抗性統合失調症の症例群の検討

木田 直也 国立病院機構琉球病院

S14-3 クロザピン血中濃度と認知機能との関連

高橋 正洋 社会福祉法人杏嶺会上林記念病院

S14-4 クロザピンの最適使用を目指すTDMの取り組み

北川 航平 岡山県精神科医療センター臨床研究部

指定討論者 村上 優 国立病院機構さいがた医療センター

指定討論者 来住 由樹 地方独立行政法人岡山県精神科医療センター

スポーツと臨床精神薬理学

Sports and clinical psychopharmacology

オーガナイザー・座長：小澤 寛樹 長崎大学医学部精神神経科学教室
座長：堀 輝 産業医科大学医学部精神医学教室

来年度に迫る東京五輪に向け、本国ではスポーツと健康が注目を集めている。米国などではアスリートに対する精神医学的トレーナーが活躍している。一方、うつ病、認知症などその精神疾患の改善・予防には睡眠、食事・栄養とともに運動・スポーツの有用性が多い報告より支持されてきている。そこで本シンポジウムでは発達症、うつ病、統合失調症の視点から具体的な対応を試みている演者よりその詳細を発表いただく。

S15-1 発達症とスポーツ

米澤 健 長崎大学医学部精神神経科学教室 / 紅葉病院薬剤部

S15-2 運動の勤労者うつ病における役割～そのメカニズム及び薬理学的な視点から～

堀 輝 産業医科大学医学部精神医学教室

S15-3 統合失調症とスポーツスポーツが統合失調症患者を変え、支援者・社会を変えるー

佐々 毅 新検見川メンタルクリニック

高齢者の精神疾患に対する薬物療法Up-to-Date

Up-to-Date on Pharmacotherapy for Psychiatric Disorders of the Elderly

オーガナイザー・座長：馬場 元 順天堂大学大学院医学研究科精神・行動科学
座長：上野 修一 愛媛大学大学院医学系研究科分子・機能領域精神神経科学講座

急速にすすむ我が国の高齢化を背景に、精神科の臨床現場においても高齢患者の診療にあたる機会は増えている。高齢患者に対する薬物療法においては、加齢に伴う薬物代謝の変化や身体合併症、併用薬剤を考慮するのはもちろんだが、それぞれの精神疾患における高齢者ならではの臨床的特徴によって、薬物療法の戦略がより若い世代の同じ疾患に対するものと異なる場合がある。本シンポジウムでは高齢者の発達障害、うつ病(特に精神病症状を伴ううつ病)、双極性障害(特に双極性うつ病)そして認知症(特にアルツハイマー型認知症)の薬物治療について、それぞれのエキスパートに最新の知見と実臨床に役立つ情報を紹介していただく。

S16-1 高齢者の発達障害—診断と治療

上村 直人 高知大学医学部精神科

S16-2 精神病症状を伴う高齢者のうつ病の薬物療法

伊賀 淳一 愛媛大学大学院医学系研究科精神神経科学講座

S16-3 高齢者の双極性障害について

仁王進太郎 東京都済生会中央病院

S16-4 アルツハイマー型認知症の疾患修飾薬の現状と展望

馬場 元 順天堂大学大学院医学研究科精神・行動科学 / 順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院

日本臨床精神神経薬理学会 2019年
ポール・ヤンセン賞受賞講演、学会奨励賞および Young Researcher 賞

CNPポール・ヤンセン賞受賞講演

10月11日(金) 13:40-14:30 第13会場(501)

座長：染矢 俊幸 一般社団法人日本臨床精神神経薬理学会理事長 /
新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野

- PJ1 Glutamatergic Neurometabolite Levels in Patients with Ultra-Treatment-Resistant Schizophrenia: A Cross-Sectional 3T Proton Magnetic Resonance Spectroscopy Study
岩田 祐輔 山梨大学医学部精神神経科学講座
- PJ2 Genome-wide association study detected novel susceptibility genes for schizophrenia and shared trans-populations/diseases genetic effect
池田 匡志 藤田医科大学医学部精神神経科学

CNP学会奨励賞

※講演はありません

- EN1 Model-Guided Antipsychotic Dose Reduction in Schizophrenia: A Single-Blind Randomized Controlled Trial
小澤 千紗 慶應義塾大学医学部精神・神経学教室
- EN2 Does relapse contribute to treatment resistance? Antipsychotic response in first- vs. second-episode schizophrenia
竹内 啓善 慶應義塾大学医学部精神・神経学教室
- EN3 Survey of anticonvulsant drugs and lithium prescription in women of childbearing age in Japan using public national insurance claims database of Japan
吉村 健佑 千葉大学医学部精神医学教室

CNP Young Researcher賞

※講演はありません

- YR Effects of ABCB1 gene polymorphisms on autonomic nervous system activity during atypical antipsychotic treatment in schizophrenia
服部 早紀 横浜市立大学医学部精神医学教室

日本臨床精神神経薬理学会 海外研修員帰朝講演

CNP海外研修員帰朝講演

10月11日(金) 13:40-14:30 第13会場(501)

座長：染矢 俊幸 一般社団法人日本臨床精神神経薬理学会理事長 /
新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野

- AB プラセボで改善するうつ病患者の生物学的基盤の解明
櫻井 準 Depression Clinical and Research Program, Department of Psychiatry, Massachusetts General Hospital, USA / 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

JSCNP

ポール・ヤンセン賞、学会奨励賞、
Young Researcher 賞、
海外研修員帰朝講演

一般演題 (口演)

口演1

10月11日(金) 8:40 ~ 10:20 第9会場(405)

座長：高橋 一志 東京女子医科大学神経精神科

- 1-1 クロザピンの超緩徐増量と安全性の関連：単施設過去起点コホート研究
塚原 優 岡山県精神科医療センター
- 1-2 クロザピン治療におけるHLA-B*59:01遺伝子検査の費用対効果を用いた有用性の検討
二宮 光平 藤田医科大学病院精神神経科学
- 1-3 クロザピンと好酸球性肺炎の関連性：
日本人の治療抵抗性統合失調症患者を対象とした後方視的検討
中村 優 医療法人社団更生会草津病院内科
- 1-4 日本人統合失調症患者でのクロザピンと活性代謝物ノルクロザピンの血中濃度および
血中濃度比の推移モデルの構築
森田 和弥 熊本大学薬学部薬物治療学分野

口演2

10月11日(金) 8:40 ~ 10:20 第10会場(406)

座長：西口 直希 せせらぎ心療クリニック

- 2-1 双極性うつ病におけるラモトリギン治療反応性と抗精神病薬併用量との関連について
廣瀬 智之 近畿大学医学部精神神経科学教室 / 医療法人 爽神堂七山病院
- 2-2 ラメルテオンと高照度光療法により抗うつ薬の減量に至った概日リズム睡眠障害を伴った
うつ病の1例
北林 佳晃 獨協医科大学精神神経医学講座
- 2-3 うつ病治療において何が患者満足度に関連する因子なのか？大規模インターネット調査の
再解析
浅井 宏友 杏林大学医学部精神神経科学教室
- 2-4 高用量のフルボキサミンにアリピプラゾールの増強療法を行ったことで速やかに寛解に
至った重症強迫性障害の一例
三好 幸代 愛媛大学大学院医学系研究科精神神経科学講座

口演3

10月11日(金) 10:30 ~ 12:10 第8会場(404)

座長：稲垣 中 青山学院大学教育人間科学部

- 3-1 統合失調症急性増悪時における服薬アドヒアランスと薬物治療ストラテジー
田中 康平 地方独立行政法人山梨県立北病院
- 3-2 日本において統合失調症の持効性注射剤処方に対する入院時出来高算定が導入された場合の
医療経済効果評価
桐谷 麻美 ヤンセンファーマ株式会社
- 3-3 統合失調症患者における幻聴体験の概日リズム：時間薬理学への可能性
小泉 輝樹 慶應義塾大学医学部精神神経科学教室 / 国立病院機構下総精神医療センター精神科

JSCNP

一般演題 (口演)

O3-4

「重度かつ慢性」患者への包括支援実践ガイドに記載された統合失調症薬物療法ガイドの作成と臨床的位置づけ

宮田 量治 山梨県立北病院

□演4

10月11日(金) 10:30 ~ 12:10 第9会場(405)

座長：兼田 康宏 岩城クリニック心療内科・精神科

O4-1

精神症状の増悪を繰り返す統合失調症患者に対して持続性注射剤及びasenapineが症状改善に寄与した1例

井上 悟 浅井病院

O4-2

うつ病に併発した緊張型頭痛の患者に対するSNRIとSSRIの効果を検討するベンラファキシンとエスシタロプラムとの比較検討

井上 悟 浅井病院

O4-3

単科精神病院における深部静脈血栓症を併発した重症うつ病へのmECT

阿部 恭久 八代更生病院

O4-4

ECTにおける有効けいれん発作を包括的に評価するSeizure quality categoriesを用いた後方視研究-導入麻酔薬が発作の質に及ぼす影響について-

青木 宣篤 関西医科大学総合医療センター

□演5

10月11日(金) 10:30 ~ 12:10 第10会場(406)

座長：新開 隆弘 産業医科大学医学部精神医学教室

O5-1

統合失調症を発症した先天性QT延長症候群患者にアリピプラゾールを投与した1例

池田 仁 滋賀医科大学精神医学講座

O5-2

統合失調症のD-細胞仮説は、進行性病態の分子基盤を説明する

池本 桂子 いわき市医療センター精神科(リエゾン科)

O5-3

抗精神病薬未服薬の早期精神病における血清中グルタミン酸代謝物の解析

田形 弘実 東邦大学医学部精神神経医学講座

O5-4

クロザピン中止例の1年間の経過：後方視的診療録調査

渡邊茉衣子 山梨県立北病院

□演6

10月12日(土) 8:40 ~ 10:20 第10会場(406)

座長：中村 明文 あかりクリニック

O6-1

治療抵抗性の強迫症状に電気けいれん療法が有効であった2例

渡辺 杏里 京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学

O6-2

日本人患者に対するCYP2D6遺伝子多型がvenlafaxineおよびO-desmethylvenlafaxineの鏡像異性体代謝に及ぼす影響について

佐々木太郎 獨協医科大学精神神経医学講座

O6-3

抗うつ薬服用患者のうつ病心理教育および理解と処方内容；抗うつ薬について

富田 哲 弘前大学大学院医学研究科神経精神医学講座

O6-4

特発性大脳基底核石灰化症を有する双極性障害患者の臨床的特徴について：症例報告の系統的レビュー

石飛 信 医療法人社団東京愛成会高月病院

口演7

10月12日(土) 10:30 ~ 12:10 第9会場(405)

座長：木代 眞樹 きしろメンタルクリニック

07-1 セロトニン症候群と悪性症候群との鑑別が困難であった1症例

鍋島 賢大 特定医療法人佐藤会弓削病院

07-2 薬物相互作用と腎機能低下によりリチウム中毒を反復した一例

大和田 環 獨協医科大学精神神経医学講座

07-3 母集団薬物動態—薬力学解析によるパロキセチンの個別化投与設計への試み

森田 和弥 熊本大学薬学部薬物治療学分野

07-4 皮膚掻痒症：精神医学的鑑別診断と身体的基礎疾患齊尾 武郎 フジ虎ノ門整形外科病院精神科、
SMBC日興証券健康管理室**口演8**

10月12日(土) 10:30 ~ 12:10 第10会場(406)

座長：安川 節子 熊本ファミリーメンタルクリニック

08-1 Clozapine 治療に関連して生じた肺炎の2例

瀬戸 恵理 山梨県立北病院

08-2 うつ病と線維筋痛症にデュロキセチンとミルタザピンの併用が著効した1例

横山 宜史 獨協医科大学精神神経医学講座

08-3 周期的な緊張病性昏迷に炭酸リチウムが著効した統合失調症の1例

佐藤 由英 獨協医科大学精神神経医学講座

08-4 抗うつ剤投与後に末梢性浮腫を繰り返した治療抵抗性うつ病症例

手銭 宏文 産業医科大学医学部精神医学教室

JSCNP

一般演題
(口演)

ポスター発表

10月11日(金) 13:40 ~ 15:10 ポスター会場(福岡国際会議場 2階 多目的ホール)
10月12日(土) 16:40 ~ 17:25 ポスター会場(福岡国際会議場 2階 多目的ホール)

ポスター 1

10月11日(金) 13:40 ~ 15:10

座長：竹内 啓善 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

P1-1 健康保険データベースを用いた認知症患者における治療実態調査
山戸健太郎 武田薬品工業株式会社ジャパンメディカルオフィス

P1-2 精神障害患者の入院時社会機能と健康関連QOL
稲垣 中 青山学院大学教育人間科学部 / 青山学院大学保健管理センター

P1-3 ステロイド性抗炎症薬内服者の向精神薬処方パターン：本邦のレセプトデータ解析
彌富 泰佑 川崎市立川崎病院精神・神経科

P1-4 高齢者における経管栄養から経口栄養への回復と服用薬剤との関連性を検討した長期観察研究
鬼木健太郎 熊本大学大学院生命科学研究部薬物治療学分野

ポスター 2

10月11日(金) 13:40 ~ 15:10

座長：岸本泰士郎 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

P2-1 高齢女性統合失調症患者に対するbrexpiprazoleの忍容性の検討
青木 岳也 医療法人扶老会扶老会病院

P2-2 急性期統合失調症におけるbrexpiprazoleの有効性
一瀬 瑞絵 福島県立医科大学医学部神経精神医学講座 / 公益財団法人星総合病院星ヶ丘病院

P2-3 DIEPSSの因子構造をもとに錐体外路症状を再考する
一向精神薬処方に関するアジア国際共同研究から
久保田智香 国立精神・神経医療研究センター病院

P2-4 精神科慢性期病棟入院患者の骨密度についての検討
川口 要 相州病院

ポスター 3

10月11日(金) 13:40 ~ 15:10

座長：高木 博敬 医療法人大和会西毛病院

P3-1 中止に至ったクロザピン症例の実態調査
大久保由衣 順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院 薬剤科

P3-2 統合失調症における低ナトリウム血症と関連する因子について
福井 直樹 新潟大学医歯学総合病院精神科

P3-3 統合失調症における社会機能と主観的ウェルビーイングの変化に対する社交不安症状の関与
根本 隆洋 東邦大学医学部精神神経医学講座

P3-4 機械学習を用いた高齢統合失調症患者における抗精神病薬のドーパミン受容体占有率と疾患重症度による認知障害分類
楠戸 恵介 慶應義塾大学医学部精神神経科学教室

JSCNP

一般演題(ポスター)

座長：鈴木 利人 順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院メンタルクリニック

- P4-1** 自閉スペクトラム症における過去が現在の意思決定に与える影響について
藤野 純也 昭和大学発達障害医療研究所 / 京都大学大学院医学研究科精神医学教室
- P4-2** 高用量セルトラリンとラモトリギンの併用療法が奏功した重症強迫症の1症例
渡邊 崇 桂慈会菊池病院 / さくら・ら心療内科 / 獨協医科大学精神神経医学講座
- P4-3** 外来における児童・青年期ADHD患者に対する処方状況調査
木本啓太郎 東海大学医学部専門診療学系精神科学
- P4-4** 小児期の注意欠如多動性障害(ADHD)患者を対象にしたチペピジンヒベンズ酸塩の有効性を検討するためのプラセボ対照二重盲検比較試験
佐々木 剛 千葉大学医学部附属病院こどものこころ診療部 / 千葉大学大学院医学研究院 精神医学

座長：菅原 典夫 獨協医科大学精神神経医学講座

- P5-1** 抗精神病薬誘発性アカシジアに対するガバペンチンエナカルビルの有効性：探索的試験
竹島 正浩 秋田大学医学部精神科学講座
- P5-2** 古い頭部CT画像を用いた統合失調症患者の縦断的脳体積推移の検証
山中 浩嗣 千葉県精神科医療センター精神科
- P5-3** Blonanserin テープ製剤による適用部位関連有害事象の検討
嶋 泰一 大日本住友製薬株式会社メディカルアフェアーズ部
- P5-4** クロザピン血漿中濃度高値での治療中にけいれん発作が出現した治療抵抗性統合失調症の一例
渡辺 研弥 福島県立医科大学附属病院薬剤部

座長：岸田 郁子 横浜市立大学医学部精神医学 / 清心会藤沢病院

- P6-1** 血中サイトカイン濃度はミルタザピンとSSRIの治療反応に異なって寄与し得るか—GUNDAM studyより—
阿竹 聖和 産業医科大学医学部精神医学教室
- P6-2** うつ病治療予測マーカーとしての血清コルチゾール値の可能性
常山 暢人 新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野
- P6-3** 双極性障害治療における情動安定剤に併用される抗精神病薬と抗うつ薬の特性について—MUSUBIプロジェクトより—
古郡 規雄 獨協医科大学精神神経医学講座 / 日本臨床精神神経薬理学会
- P6-4** 男性うつ病患者と血清estradiol値との関連
有波 浩 新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野

座長： 稲田 健 東京女子医科大学医学部精神医学講座

- P7-1** 難治性うつ病性障害に対するラモトリギン強化療法患者においてABCG2 C421Aがラモトリギン血漿濃度に与える影響
鈴木 毅 琉球大学医学部附属病院薬剤部
- P7-2** 難治性うつ病性障害におけるラモトリギン強化療法の治療反応性とUGT1A4 及びUGT2B7遺伝子多型との関連
香川 祥子 琉球大学大学院医学研究科精神病態医学講座
- P7-3** うつ病患者におけるSSRIとMIRの治療効果予測因子としてのmiRNA発現量の有用性～Genotype Utility Needed for Depression Antidepressant Medication (GUNDAM) studyより～
緒方 治彦 関西医科大学精神神経科学教室 / 社会福祉法人青祥会セフィロト病院
- P7-4** 難治性うつ病性障害に対するlamotrigine強化療法の治療反応性とABCG2 C421A遺伝子多型との関連
中村 明文 琉球大学大学院精神病態医学講座 / あかりクリニック

座長： 鈴木 昭仁 山形大学医学部精神医学講座

- P8-1** 治療抵抗性の精神病症状を伴う躁状態にトピラマート併用療法が奏効した双極性障害の1例
後藤 純一 熊本県立こころの医療センター
- P8-2** ペランパネル投与によりてんかん患者の睡眠障害の改善を示した一例
高野 謹嗣 関西医科大学総合医療センター精神神経科学教室
- P8-3** 幼少期の虐待や性格傾向とmiRNA発現量の関連及び薬物療法の治療効果予測因子の探索～Genotype Utility Needed for Depression Antidepressant Medication (GUNDAM) studyより～
船槻 紀也 関西医科大学精神神経科学講座
- P8-4** うつ病増強療法の増強期間に関するシステマティックレビュー
加藤 英生 慶應義塾大学医学部精神神経科学教室

座長： 嶽北 佳輝 関西医科大学精神神経科学教室

- P9-1** 大うつ病性障害の治療における抗精神病薬の単剤療法、抗うつ薬と抗精神病薬の併用療法のリスク/ベネフィットバランス：ランダム化比較試験の系統的レビューとメタ解析
萩 勝彦 大日本住友製薬株式会社メディカルアフェアーズ部
- P9-2** 小児双極性障害うつ患者の治療におけるルラシドン及びその他の非定型抗精神病薬の有効性、安全性：系統的レビューとネットワークメタ解析
萩 勝彦 大日本住友製薬株式会社メディカルアフェアーズ部
- P9-3** 成人統合失調症患者に対するルラシドンの安全性：投与タイミングと有害事象発現リスクの関係解析
萩 勝彦 大日本住友製薬株式会社メディカルアフェアーズ部

P9-4

抗精神病薬による血中プロラクチン濃度変化の個人差

南畝 晋平 兵庫医療大学薬学部

ポスター 10

10月12日(土) 16:40 ~ 17:25

座長: 住吉 太幹 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・予防精神医学研究部

P10-1

パリペリドンパルミチン酸エステル有用性における検討

岡田三知那 三枚橋病院

P10-2

統合失調症患者に対する抗精神病薬の抗うつ作用の検討:
ランダム化比較試験の系統的レビューとメタ解析

三浦 至 福島県立医科大学医学部神経精神医学講座

P10-3

関西医科大学総合医療センターにおけるアセナピン処方実態の調査

柳田 知世 関西医科大学精神神経科

P10-4

「ドパミンD2受容体部分アゴニストbrexpiprazoleへの切り替えの検討 第2報」
—統合失調症患者を対象としたbrexpiprazoleの長期投与試験における切り替え例に関する追加解析—

石郷岡 純 CNS薬理研究所

ポスター 11

10月12日(土) 16:40 ~ 17:25

座長: 小野 久江 関西学院大学文学部総合心理科学科

P11-1

若年発症統合失調症患者の治療における非定型抗精神病薬の有益性/有害性:
系統的レビューとメタ解析

萩 勝彦 大日本住友製薬株式会社メディカルアフェアーズ部

P11-2

成人統合失調症患者の治療における抗精神病薬の代謝関連パラメータへの影響:
系統的レビューとメタ解析

萩 勝彦 大日本住友製薬株式会社メディカルアフェアーズ部

P11-3

若年発症統合失調症患者の治療における非定型抗精神病薬の有効性:
系統的レビューとメタ解析

萩 勝彦 大日本住友製薬株式会社メディカルアフェアーズ部

P11-4

若年発症統合失調症患者の治療における非定型抗精神病薬の安全性・忍容性:
系統的レビューとメタ解析

萩 勝彦 大日本住友製薬株式会社メディカルアフェアーズ部

P11-5

抗精神病薬多剤併用療法が日本人統合失調症患者の喫煙に与える影響

鈴木雄太郎 医療法人敬愛会 末広橋病院

ポスター 12

10月12日(土) 16:40 ~ 17:25

座長: 奥川 学 関西記念病院

P12-1

Lamotrigineによる難治性うつ病性障害強化療法の治療反応性とAMPA受容体
GRM2遺伝子多型との関連性について

永井 五洋 琉球大学大学院精神病態医学講座

JSCNP

一般演題(ポスター)

- P12-2 大うつ病性障害患者におけるミルタザピンと選択的セロトニン再取り込み阻害薬の治療反応とABCB1遺伝子多型の関連
砂田 尚孝 関西医科大学精神神経科学教室
- P12-3 精神科病院における双極性障害に対する薬物の使用状況調査
阿部 恭久 八代更生病院
- P12-4 ベンゾジアゼピン系薬剤の減量化がうつ病に与えるリスクとベネフィットに関する予備的研究
越川 陽介 関西医科大学精神神経科学教室

ポスター 13

10月12日(土) 16:40 ~ 17:25

座長： 上村 誠 溝の口メンタルクリニック

- P13-1 双極性障害うつ症状の治療における非定型抗精神病薬の単剤療法、および気分安定薬との併用療法の有効性：プラセボ対照ランダム化比較試験の系統的レビューとメタ解析
野坂 忠史 大日本住友製薬株式会社
- P13-2 双極性障害うつ症状の治療における非定型抗精神病薬の単剤療法、および気分安定薬との併用療法の安全性・忍容性：プラセボ対照ランダム化比較試験の系統的レビューとメタ解析
野坂 忠史 大日本住友製薬株式会社
- P13-3 双極性障害うつ症状の治療における非定型抗精神病薬の単剤療法、および気分安定薬との併用療法のリスク・ベネフィット評価：プラセボ対照ランダム化比較試験の系統的レビューとメタ解析
野坂 忠史 大日本住友製薬株式会社
- P13-4 統合失調症患者における抗精神病薬持効性注射剤中断者のその後の処方：診療録調査
浅野 圭介 公益財団法人井之頭病院精神科 / 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

ポスター 14

10月12日(土) 16:40 ~ 17:25

座長： 香月あすか 産業医科大学医学部精神医学教室

- P14-1 ブロナンセリンの慢性投与はラット海馬の脳内炎症を軽減させる
村田 雄介 福岡大学薬学部臨床薬物治療学
- P14-2 治療抵抗性統合失調症患者を対象としたクロザピンの製造販売後調査結果(患者背景別の安全性、有効性の解析)
鳥山 和宏 ノバルティス ファーマ株式会社メディカル本部
- P14-3 パリペリドンパルミチン酸エステル(ゼプリオン®)の製造販売後の医薬品安全性監視活動において報告された副作用についての報告
若松 昭秀 ヤンセンファーマ株式会社
- P14-4 クロザピン用グラスゴー抗精神病薬副作用評価尺度(GASS-C)日本語版の信頼性と妥当性の検討
北川 航平 岡山県精神科医療センター臨床研究部

JSCNP

一般演題(ポスター)

座長：竹内 賢 星ヶ丘病院

- P15-1** 統合失調症患者を対象としたAsenapine舌下錠6週間投与時の使用実態下における適正使用を踏まえた安全性の検討 - 使用成績調査の中間報告より -
相宗沙也香 Meiji Seikaファルマ株式会社メディカルサイエンス推進室
- P15-2** 経頭蓋磁気刺激による統合失調症患者の皮質抑制障害の検討
宮澤 惇宏 千葉大学医学部附属病院精神神経科
- P15-3** 慢性期統合失調症患者の抗精神病薬の減量による認知機能・モノアミン代謝産物への影響について
堀越 翔 医療法人ほりこし心身クリニック / 福島県立医科大学医学部神経精神医学講座
- P15-4** 非定型抗精神病薬の急性期統合失調症患者に対する認知機能障害改善効果と改善予測因子
堀 輝 産業医科大学医学部精神医学教室

座長：新開 隆弘 産業医科大学医学部精神医学教室

- P16-1** 高齢統合失調症患者に対するbrexpiprazoleの長期の有効性及び安全性の検討
稲田 健 東京女子医科大学
- P16-2** うつ病患者のベースライン症状クラスタリングによる患者層別治療反応解析：ベンラファキシン徐放性製剤臨床試験データを用いたPatient-level Meta-analysis
加藤 正樹 関西医科大学医学部医学科精神神経科学講座
- P16-3** うつ病患者における身体的特徴及び症状の主観的捉え方が治療反応に与える影響の検討—GUNDAM studyより—
檜原 彩乃 関西医科大学医学部精神神経科学講座
- P16-4** パリペリドンとリスペリドンの自律神経活動へ与える影響の比較
服部 早紀 横浜市立大学医学部精神医学教室

座長：菊池 俊暁 慶應義塾大学医学精神・神経科学教室

- P17-1** 統合失調症と血清cortisol値、IGF-1値との関連
有波 浩 新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野
- P17-2** 抗精神病薬持効性注射剤使用中の統合失調症患者における、活動時間の増減と認知機能や社会機能の関連の検討
内藤みなみ 関西医科大学精神神経科学教室
- P17-3** 4種の第二世代抗精神病薬が心電図QT間隔に与える影響の差とその背景
渡邊 純蔵 新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野 / 医療法人社団敬成会 白根緑ヶ丘病院
- P17-4** 中性脂肪値と抗精神病薬との関連について
小野 信 新潟大学大学院医歯学総合研究科地域精神医療学寄附講座

座長： 大坪 天平 東京女子医科大学東医療センター精神科

P18-1 一酸化炭素中毒患者における¹²³I-FP-CIT SPECTを用いた線条体ドパミントランスポータの画像評価

能登 契介 山形大学医学部精神医学講座

P18-2 アカンプロサートカルシウム処方歴のあるアルコール依存症患者の通院継続因子

佐藤 英明 八代更生病院

P18-3 電気けいれん療法に関連した有害事象の臨床疫学的調査

綾仁 信貴 京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学

P18-4 統合失調症患者における生活習慣病罹患率と多剤併用療法との関連

須貝 拓朗 新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野

第49回日本神経精神薬理学会
プログラム

特別講演

特別講演

10月13日(日) 13:40 ~ 14:40 第13会場(501)

座長：宮田 久嗣 東京慈恵会医科大学精神医学講座

SL

Genetics of Tobacco Smoking

Edward F. Domino Department of Pharmacology, University of Michigan, USA

精神科専門薬剤師精神医学セミナー

精神科専門薬剤師精神医学セミナー

10月13日(日) 10:10～12:10 第11会場(502)

精神科薬物療法における精神科専門薬剤師の役割

The role of Psychiatric Pharmacy Specialist in psychopharmacotherapy

オーガナイザー・座長：吉尾 隆 東邦大学薬学部臨床薬学研究室
座長：天正 雅美 社会医療法人北斗会さわ病院

日本病院薬剤師会による精神科専門薬剤師認定制度が開始されて12年が経過している。この間に精神科専門薬剤師の認定を受けた薬剤師は、全国で約50名となっている。また、精神科領域における薬物治療の適正化を目的として、2016年には一般社団法人日本精神薬学会が設立され、認定薬剤師制度を運営している。精神科専門薬剤師の役割は、精神科薬物治療における処方支援と処方設計及び治療管理であるが、日々の臨床現場において実際にどのように機能し、その役割が患者、医療従事者に認知されているのかについては、これまで検証されてきていない。そこで、今回のセミナーでは、3名の精神科専門薬剤師から、日常業務で行っている処方支援・処方設計の成功例・失敗例等を紹介していただく。また、指定発言として、精神科専門医から現状での問題点の指摘と今後への期待について意見を頂き、精神科薬物治療における精神科専門薬剤師の役割について議論を深めたい。

PS-1 精神科病院薬剤師の臨床における役割

谷藤 弘淳 こだまホスピタル薬剤部

PS-2 精神科専門薬剤師によるより良い薬物療法と意思決定のためのエビデンスに基づいた処方提案

桑原 秀徳 医療法人せのがわ瀬野川病院薬剤課

PS-3 適切な薬物療法を支援するための精神科専門薬剤師の役割

柴田 木綿 八幡厚生病院薬剤課

指定発言 稲垣 中 青山学院大学教育人間科学部 / 青山学院大学保健管理センター

JSNP

精神科専門薬剤師
精神医学セミナー

シンポジウム

シンポジウム1

10月12日(土) 8:40 ~ 10:20 第4会場(409)

ノルアドレナリン神経の多様な機能と関連する病態生理

Diverse physiological and pathophysiological roles in noradrenergic neurons

オーガナイザー・座長：戸田 重誠

昭和大学医学部精神医学講座/金沢大学医学部精神行動科学

座長：南本 敬史

国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構 放射線医学総合研究所脳機能イメージング研究部

ノルアドレナリンは、ドパミン、セロトニンと並ぶ重要なneuromodulatorである。その重要性は古くから認識されていたにも関わらず、他の神経伝達物質に比べると研究は十分進んでいるとは言えない。これまで、ノルアドレナリンが注意や覚醒に重要であることは知られていたが、それ以外にも、例えば作業記憶や情動に関する記憶、探索行動、困難を乗り越えるための意欲(エネルギー)といった様々な機能に関係すること、さらにうつ病や注意欠陥多動性障害などの精神疾患に関与することもわかってきた。本シンポジウムでは、このようなノルアドレナリン、およびその起始核である青斑核の多様な機能に関して、げっ歯類・サル・ヒトの最新の知見を紹介する。

S1-1

What is the role of the LC/NA system in effort processing?

Sebastien Bouret

CNRS/ ICM

S1-2

Clonidineにより明らかとなったノルアドレナリンによる意思決定中の海馬情報検索の調節

雨宮誠一郎

University of Minnesota, Department of Neuroscience /

理化学研究所脳神経科学研究センター / 首都大学東京人間健康科学研究科

S1-3

青斑核ノルアドレナリンニューロンの活動亢進は学習された情動記憶の想起を促進する

井口 善生

福島県立医科大学学生体機能研究部門

S1-4

ADHD成人における非定型なアラートニング制御：瞳孔径計測による検討

白間 綾

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部 /

昭和大学発達障害医療研究所

JSNP

シン
ポ
ジ
ウ
ム

あなたの知らない"製薬企業の創薬研究"

"Development of new drugs in pharmaceutical industry" you do not know

オーガナイザー・座長：橋本 謙二 千葉大学社会精神保健教育研究センター
 オーガナイザー：茶木 茂之 大正製薬株式会社医薬研究本部
 座長：岸本泰士郎 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

中枢神経系の薬剤開発の失敗率が非常に高いことから、海外の大手製薬企業は中枢神経薬の開発から撤退するかあるいは規模を縮小する傾向がある。一方、わが国の製薬企業は中枢神経薬の開発から撤退せず、地道に研究開発を進めているのは喜ばしいことである。新薬を開発するには、研究テーマの起案に始まり、多くの候補化合物の合成と薬理・薬物動態・安全性評価、さらには絞られた化合物についてのGLP試験などの多くの試験が必要である。今回、国内製薬企業で臨床試験を実施している候補化合物について、創薬研究から開発研究の戦略を説明して頂き、アカデミアや製薬企業の若手研究者に今後の創薬・開発研究のヒントを与えることを目的としている。近年、AMEDもアカデミアの研究者に対して創薬支援事業を展開しているが、アカデミアの研究者にとっても、創薬研究、臨床試験開始に際してのハードルおよび臨床試験の課題について知ることは重要である。今回のシンポジウムで、アカデミアの研究者にも創薬研究の流れを勉強して頂くことも本シンポジウムの狙いである。本シンポジウムの指定討論者には、抗精神病薬アリピプラゾールの開発者である菊池哲朗博士(大塚製薬)と若手のアカデミア研究者の吾郷由希夫先生(大阪大学)をお願いした。

S2-1 グループⅡ代謝型グルタミン酸受容体作動薬TS-134の研究開発

吉田 茂 大正製薬株式会社医薬開発本部開発企画部

S2-2 アゴニスト作用の低い新規AMPA型グルタミン酸受容体増強薬TAK-137とTAK-653の抗うつ薬様作用の検証

木村 温英 武田薬品工業株式会社 リサーチ ニューロサイエンス創薬ユニット

S2-3 抗精神病薬ブロナンセリンの研究開発

馬場 聡子 大日本住友製薬株式会社

指定討論者 菊池 哲朗 大塚製薬株式会社医薬品事業部新薬研究部門

指定討論者 吾郷由希夫 大阪大学 大学院薬学研究科薬剤学分野

情動の神経機構とその異常としての精神疾患病態の解明

Neural mechanisms of emotion and its dysfunctions in psychiatric disorders

オーガナイザー：村井 俊哉 京都大学大学院医学研究科・精神医学
 オーガナイザー・座長：小川 正晃 京都大学医学研究科メディカルイノベーションセンター
 座長：雨森 賢一 京都大学 白眉センター・霊長類研究所

本シンポジウムは、不安や意欲、価値判断の意思決定の神経機構と、その異常に関わる不安障害、うつ病、強迫性障害などの精神疾患病態の解明を目指した研究の発表を行う。げっ歯類、サル、ヒトにおいて、分子生物学、電気生理学、イメージング、計算モデルといった、種の特徴を活かした最先端の研究を行う4名が登壇する。

1.名古屋大学の竹本は、新規分子マーカーを活用した、不安行動における扁桃体神経回路機能(マウス)、2.京都大学の小川は、光遺伝学による、不確実な報酬に対する意欲に関わる前頭前野・中脳ドーパミン細胞機能(マウス・ラット)、3.京都大学の雨森は、多領域神経活動記録・回路操作や計算モデルによる、不安障害やうつ病に関わる帯状回皮質・線条体機能(サル)、4.ATRの田中は、fMRIによる全脳機能イメージング・計算モデルによる、強迫性障害やADHD患者の意思決定などの脳機構(ヒト)に関する発表を行う。

S3-1 扁桃体延長部分マーカーを手掛かりとした情動制御機構の解明

竹本 さやか 名古屋大学環境医学研究所神経系分野

S3-2 意思決定における眼窩前頭皮質の役割

小川 正晃 京都大学医学研究科メディカルイノベーションセンター

S3-3 接近回避葛藤下の意思決定を制御する前帯状皮質膝前部-ストリオソーム回路

雨森 賢一 京都大学白眉センター・霊長類研究所

S3-4 仮説ベース/仮説フリーアプローチによる精神疾患の脳機構解明

田中 沙織 ATR脳情報通信総合研究所

統合失調症を再考する

To reconsider schizophrenia

オーガナイザー・座長：菊地 哲朗 大塚製薬株式会社医薬品事業部
座長：石郷岡 純 CNS薬理研究所

統合失調症治療薬について、ドパミン関連以外の創薬研究開発(グルタミン酸関連など)が進められていましたが、残念ながらことごとく失敗しています。そして、統合失調症にはまだ解決できていないアンメット・メディカル・ニーズが多数あります。このシンポジウムでは、アカデミアおよび製薬メーカーから専門の先生方をお招きし、①統合失調症のアンメット・メディカル・ニーズ、②統合失調症治療薬の研究開発の動向、および③今後の治療展望について議論を深めたいと思います。そして、シンポジウムに参加している若い研究者の方々が何らかの気づきを得ていただけるような本音で語るシンポジウムにしたいと考えております。

S4-1 統合失調症のアンメット・ニーズと新薬への期待

大森 哲郎 徳島大学大学院医歯薬学研究部精神医学分野

S4-2 ドパミンD2受容体部分アゴニスト系抗精神病薬の薬理学的特性

菊地 哲朗 大塚製薬株式会社医薬品事業部新薬研究部門

S4-3 ドパミンD2受容体に作用しない新規抗精神病薬SEP-363856の開発

藪内 一輝 大日本住友製薬株式会社開発本部

S4-4 抗精神病薬の基礎薬理・これまでと最近の知見

押淵 英弘 東京女子医科大学医学部精神医学講座

精神疾患の早期介入に向けた治療法の開発；げっ歯類、霊長類、ヒトにおけるエビデンス
 Development of therapeutics for early intervention in psychiatric disorders; Evidence from rodents,
 primates, and humans

オーガナイザー・座長：住吉 太幹 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・予防精神医学研究部
 座長：牧之段 学 奈良県立医科大学医学部精神医学講座

精神科疾患の早期介入法の開発が注目されている。同分野のブレーク・スルー得るためには、げっ歯類、霊長類、ヒトを用いたトランスレーショナル・リサーチの知見に基づく、精神病、気分障害、発達障害などの発症メカニズムの解明や、モデル動物を用いた“予防薬”の吟味が待たれる。本シンポジウムでは、それぞれの階層の個体における神経細胞やグリアをターゲットとした最近の研究の動向を各演者に紹介いただき、主要な精神疾患の早期介入に資する治療法開発の方向性について洞察を得る。

S5-1 動物モデルからみた愛着障害と自閉スペクトラム症の脳回路異常

牧之段 学 奈良県立医科大学医学部精神医学講座

S5-2 統合失調症と霊長類の前頭連合野について

松元まどか 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部

S5-3 ヒトにおける精神病の早期介入・予防法開発の現状

住吉 太幹 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部

発達期ストレス曝露による神経精神障害と治療戦略の考究

Study of treatment strategy on disruption of neuro-psycho-brain function by developmental stress

オーガナイザー・座長：武田 弘志 国際医療福祉大学薬学部薬理学分野
 徳山 尚吾 神戸学院大学薬学部臨床薬学研究室

精神神経疾患は先天的な遺伝的要因のみならず、後天的な環境要因が加わって発症する多因子疾患であり、胎生期から思春期に渡る発達期を通じた生物学的環境因子の精神および神経機能に及ぼす影響が注目される。これらのことから、精神神経疾患を対象にする病態研究や創薬研究において、遺伝的要因からの解析に加え、様々な環境的要因やストレスの視点からのアプローチも必要であり、それらの影響を動物レベルでモデル化し、その分子基盤を考究することが重要である。そこで、胎生期・幼少期・思春期の各ステージにおけるストレス曝露モデルを用い、その精神・神経機能について精力的に研究されている4グループに講演を依頼し、内諾を得た。本シンポジウムでは、発達期ストレスの精神神経学的脆弱性の病態生理機構のみならず、その治療戦略にもフォーカスを当て、発達期ストレスを包括的に議論したい。

S6-1 胎生期ストレスが惹起する精神的脆弱性の分子基盤の解明と抑肝散の応用

宮川 和也 国際医療福祉大学薬学部薬理学分野

S6-2 幼若期ストレスによる成長後の情動行動異常

山口 拓 長崎国際大学薬学部薬物治療学研究室

S6-3 環境要因による精神機能異常におけるセロトニン神経系のエピジェネティクス

荒木 良太 摂南大学薬学部複合薬物解析学研究室

S6-4 疼痛制御機構の変容における幼少期ストレス負荷の影響

徳山 尚吾 神戸学院大学薬学部臨床薬学研究室

大麻成分の臨床応用と有害作用：最近の基礎研究から

Clinical applications and adverse effects of components of cannabis: current status of basic science researches

オーガナイザー・座長：船田 正彦 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所
三島 健一 福岡大学薬学部生体機能制御学教室

わが国では大麻は厳しい規制が施されているが、海外では医療への応用、嗜好品として使用を認める国が存在しているのが現状である。また、海外では大麻含有成分であるカンナビジオールを主成分とした医薬品が承認されるに至り、大麻規制の在り方に関しては、国連においても熱い議論が交わされている。本シンポジウムでは、大麻について、(1)その植物としての特性、国内外の規制状況の比較、大麻および大麻含有成分の適切な取り扱いについて情報提供を行う。(2)基礎研究の領域からは、大麻および大麻含有成分について医薬品としての可能性について、その現状を詳解する。一方、最近流通している大麻は、含有成分が著しく増加しているとされ、大麻の有害作用については再評価する必要がある。大麻の有用性と有害作用を理解し、適切な大麻規制を考えるための論議を深めたい。

S7-1 米国における大麻規制の状況：医療用途と嗜好品

富山 健一 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部

S7-2 繊維型大麻草主成分カンナビジオールを応用した創薬基盤の確立に向けて

竹田 修三 広島国際大学薬学部環境毒物代謝学研究室

S7-3 大麻成分の有用性と危険性に関する研究

三島 健一 福岡大学薬学部生体機能制御学教室

S7-4 大麻成分の有害作用に関する研究：依存性と細胞毒性

船田 正彦 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所

PTSDの新規予防法・治療法の開発—基礎から臨床へ—

Novel prevention and treatment of PTSD -from basic research to clinical trial-

オーガナイザー・座長：森信 繁 吉備国際大学保健医療福祉学部作業療法学科
座長：喜田 聡 東京大学大学院農学生命科学研究科

PTSD治療にはSSRIと持続暴露療法の併用が推奨されるが、本療法に抵抗性の症例も少なくなく、新たな予防・治療法の開発が望まれる。本シンポでは恐怖記憶というPTSDの中核症状を標的に、1) 外傷体験直後のレム睡眠調整による恐怖記憶の固定化を抑える予防法の開発、2) 恐怖記憶の忘却という再体験を必要としない新たな認知行動療法の開発のための基礎研究、3) 恐怖記憶の消去障害に対する脳局所刺激療法開発のためのPTSDモデルを用いた基礎研究、4) 恐怖記憶の消去を目的としたfMRIによるNeurofeedback治療の現状、を発表する。

S8-1 動物モデルによる睡眠中の恐怖記憶が固定化されるメカニズムの解明

坂口 昌徳 筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構

S8-2 海馬神経新生エンハンサーを用いた恐怖記憶忘却方法の開発とPTSD治療方法開発への展望

福島 穂高 東京農業大学生命科学部バイオサイエンス学科

S8-3 化学遺伝学による内側前頭前野皮質の興奮性神経細胞の賦活は、PTSD動物モデルにおける恐怖記憶の消去障害を軽減する

淵上 学 広島大学病院精神科

S8-4 PTSDに対するneurofeedback治療法の開発

千葉 俊周 国際電気通信基礎技術研究所

グルタミン酸をKey分子とした精神疾患発症の新規メカニズム

Gender differences involved in glutamate in the mice central nervous system

オーガナイザー・座長：新田 淳美 富山大学大学院医学薬学研究部(薬学)・薬物治療学研究室
座長：照沼 美穂 新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生化学分野

グルタミン酸は脳で非常に重要な神経伝達物質であることは周知のことである。その神経伝達機能の結果として、依存の発生、不安の惹起、認知記憶機能への貢献がなされ、生体が成り立っている。本シンポジウムでは、グルタミン酸または、その受容体やトランスポーターの障害が元でおこる依存形成や記憶認知障害に対する性差について、議論をする予定である。また、不安制御の新規メカニズムについても迫りたいと考えている。

S9-1 代謝型グルタミン酸受容体3を介した精神疾患関連メカニズムの検討

宇野 恭介 摂南大学薬学部機能形態学 / 富山大学大学院医学薬学研究部(薬学)薬物治療学研究室

S9-2 慢性ストレスとコカインがグルタミン酸-グルタミン回路に与える影響

嶋本 晶子 メハリー医科大学神経科学分野

S9-3 不安行動におけるカイニン酸型グルタミン酸受容体GluK3の役割

飯田 和泉 新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生化学分野 / 新潟大学脳研究所モデル動物開発分野

精神疾患における炎症状態を担うダメージ関連分子の役割

Roles of damage-associated molecules for inflammatory conditions in mental illnesses

オーガナイザー・座長：古屋敷智之
加藤 忠史

神戸大学大学院医学研究科薬理学分野
理化学研究所脳神経科学研究センター精神疾患動態研究チーム

臨床・基礎研究の両面から、精神疾患における炎症関連分子の関与が示唆されてきた。近年、動物モデルを用い、慢性ストレスによるうつ様行動や不安様行動などの情動変化にTLR2/4やNLRP3など自然免疫分子を介した脳内炎症反応が重要であることが示された。元来、自然免疫分子は微生物の分子パターンを認識する分子群として同定されたが、近年ダメージ関連分子と称する様々な内在性物質が自然免疫分子を活性化し、非感染性炎症を惹起することが提唱されている。ダメージ関連分子は循環器疾患や代謝疾患など他の炎症疾患にも関与しており、精神疾患におけるダメージ関連分子の働きが他の炎症疾患のリスクを高める可能性も考えられる。そこで本シンポジウムでは、精神疾患や他の炎症疾患のダメージ関連分子研究を一堂に会し、精神疾患における炎症状態を担うダメージ関連分子の役割やダメージ関連分子を標的とした精神疾患創薬の有効性を議論したい。

S10-1 脳障害の鍵分子としての HMGB1：脳卒中、脳外傷からてんかんまで

西堀 正洋 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科薬理学分野

S10-2 心不全無菌性炎症惹起機構におけるミトコンドリア品質制御の役割

大津 欣也 キングスカレッジロンドン循環器科

S10-3 精神疾患の病態にDAMPsは関与するのか？

岩田 正明 鳥取大学医学部脳神経医科学講座精神行動医学分野

S10-4 社会ストレスでの自然免疫受容体TLR2/4を介した脳内炎症とダメージ関連分子の関与

古屋敷智之 神戸大学大学院医学研究科薬理学分野

統合失調症薬物療法の多様な課題にどう対応するか

Psychopharmacological strategies for various clinical issues in schizophrenia

オーガナイザー・座長：矢部 博興 福島県立医科大学医学部神経精神医学講座
座長：堀口 淳 島根大学医学部免疫精神神経学共同研究講座

統合失調症は不均一 heterogeneousな疾患であり、症候や状態像、治療反応、経過は様々に異なる。近年、メタ解析等により抗精神病薬の有効性・忍容性に関するエビデンスは集積されてきているが、病期や状態などによってどのように薬物療法を組み立てていくかは異なり、抗精神病薬を中心とした薬剤選択やその使用方法が重要となる。本シンポジウムでは統合失調症治療において臨床的に問題となることの多い場面や課題を取り上げ、どのような治療戦略を立てていくべきかを解説・議論する。

- S11-1** 初発精神病性障害：改善後の維持療法をどうするか
松田 勇紀 東京慈恵会医科大学精神医学講座
- S11-2** 統合失調症維持期の薬物療法
三浦 至 福島県立医科大学医学部神経精神医学講座
- S11-3** 治療抵抗性統合失調症に対する治療戦略：clozapine抵抗性を含めて
嶽北 佳輝 関西医科大学精神神経科学教室
- S11-4** ドパミン過感受性精神病(DSP)の病態とその対応
高瀬 正幸 千葉大学大学院医学研究院精神医学

ADHDの薬物療法と非薬物療法
Treatments for persons with ADHD

オーガナイザー・座長：岩波 明 昭和大学医学部精神医学講座
座長：小野 和哉 聖マリアンナ医科大学精神医学講座

近年、児童思春期に加えて成人期における発達障害は、精神医学の領域においても、さらには社会的にも大きな注目を集めている。中でもADHDは成人期の精神疾患でもっとも高い有病率も持つ疾患の一つであり、薬物療法の効果が明らかであるにもかかわらず、十分な治療体制が整っているとは言えないのが現状である。このシンポジウムにおいては、小児期および成人期におけるADHDの薬物療法、非薬物療法について、現状と問題点について検討を行うことを目的としている。ADHD治療薬の効果および副作用と使い分け、年代など臨床的な要因との関連、気分障害、ASDなどの併存疾患がある場合の対処方法、薬物療法と非薬物療法の適応などについて論じる予定である。

S12-1 子どものADHDの薬物療法

横山富士男 埼玉医科大学医学部精神医学

S12-2 成人期ADHD診療における薬物療法 —治療の全体構造の中での薬物の役割—

松岡 孝裕 埼玉医科大学病院神経精神科・心療内科 / 埼玉医科大学国際医療センター精神科救命救急科

S12-3 成人期ADHDに対するGuanfacineの効果

岩波 明 昭和大学医学部精神医学講座

S12-4 ADHDの非薬物療法

小野 和哉 聖マリアンナ医科大学神経精神科学教室

情動行動の分子基盤

Molecular mechanisms of emotional behaviors

オーガナイザー・座長：山田 清文 名古屋大学大学院医学系研究科医療薬学・附属病院薬剤部
座長：喜田 聡 東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻

快・不快、恐怖、不安などの情動には、大脳基底核、扁桃核、海馬、大脳皮質等が関与する。また、情動行動の障害は様々な神経精神疾患と深く関わっていることが知られている。これら情動の制御について特有の神経核、神経回路が同定されているが、神経回路の動作原理や再編を制御するメカニズムは殆どわかっていない。本シンポジウムでは我が国を代表とする4名のシンポジストが集い、最先端の技術を駆使して情動行動がどのようなメカニズムで制御されているのかを議論する。

S13-1 報酬行動の分子基盤 ～ ICSSを用いた報酬メカニズムの解析～

井手聡一郎 東京都医学総合研究所依存性薬物プロジェクト

S13-2 恐怖記憶再固定化と消去に対する海馬の役割と記憶制御の分子機構

喜田 聡 東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻

S13-3 快・不快情動の細胞内シグナル

永井 拓 名古屋大学大学院医学系研究科医療薬学・附属病院薬剤部

S13-4 情動行動におけるセロトニン神経の役割

永安 一樹 京都大学大学院薬学研究科生体機能解析学分野

回路操作による症候の発現モデルと創薬への応用

Symptomatic animal models by circuit manipulation and their application to drug development

オーガナイザー・座長：須原 哲也 国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所
南本 敬史 国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所

近年、光遺伝学や化学遺伝学の手法を使った神経回路操作により、情動や意思決定とその障害に関連する回路機能の解析が広く行われている。このようにして作られた動物はまた創薬領域においても大きな潜在的価値があると考えられるが、その利用についてまだ十分な検討がなされているとは言えない。本シンポジウムでは特定の神経回路を操作することによって精神・神経疾患の症候に関連する機能の分子・回路メカニズムを明らかにする取り組みとともに、その実験系をどのように創薬に応用していくかを議論したい。また精神・神経疾患の症候をどのように動物で再現させるかに関しては、齧歯類からの検討に加えて霊長類を用いた場合の利点や困難さも含めて幅広い観点からの議論を行いたい。

S14-1 依存症における意思決定異常と島皮質GABA神経

溝口 博之 名古屋大学環境医学研究所次世代創薬研究センター

S14-2 セロトニン神経系の光操作と精神疾患治療への応用の可能性

宮崎 勝彦 沖縄科学技術大学院大学神経計算ユニット

S14-3 All That Glitters Is Not Gold, All That Oscillates Is Not Causal: A Reappraisal of the Role Network Oscillations Play in Parkinsonism

Kevin W. McCairn RIKEN Center for Biosystems Dynamics, Japan

S14-4 Chemogenetic functional imaging & electrophysiology: 脳局所干渉による大域ネットワーク作動変容のマルチスケール解析

平林 敏行 国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構

創薬と神経画像研究

Drug discovery and neuroimaging

オーガナイザー：宮田 久嗣 東京慈恵会医科大学精神医学講座
 座長：高橋 琢哉 横浜市立大学生理学
 小高 文聡 東京慈恵会医科大学精神医学講座

ポジトロン断層法(Positron emission tomography : PET)は、種差を超え標的分子の動態を探索できる重要な神経画像モダリティである。その特性上、PETは基礎から臨床に至るすべての創薬フェーズにおいて重要な役割を果たしているが、向精神薬の創薬では対象となる精神疾患の異質性(heterogeneity)の問題から、単一の標的分子を評価し、相補的に機能的MRIなどの他の核磁気共鳴技術による層別化や、治療有効性の評価も期待されている。本シンポジウムでは、PETを軸とした代表的な創薬フェーズ、すなわち1)基礎研究からのPETトレーサー開発、2)PETを用いたヒトにおける標的分子の評価、3)PETを用いた産学連携による創薬促進、4)PET以外の画像モダリティによる治療有効性評価の試みをテーマに、創薬と神経画像研究にかかわる最近の知見を紹介する。

S15-1 シナプス可塑性：基礎から臨床へ

高橋 琢哉 横浜市立大学医学部生理学

S15-2 PETを用いた中枢神経系の医薬品の開発

高野 晴成 国立精神・神経医療研究センター脳病態統合イメージングセンター

**S15-3 ニューロイメージングバイオマーカーを用いた創薬：
量子イメージング創薬アライアンスの取り組み**

高畑 圭輔 量子科学技術研究開発機構 放射線医学総合研究所脳機能イメージング研究部 /
慶應義塾大学医学部精神神経科学教室

S15-4 安静時機能的MRIを用いた、統合失調症の治療維持期における抗精神病薬の至適用量

小高 文聡 東京慈恵会医科大学精神医学講座

”仮想”新薬開発会議：シグマアンタゴニストの開発戦略を議論する

A virtual R&D meeting on a sigma antagonist

オーガナイザー・座長：石郷岡 純 CNS薬理研究所
 座長：中込 和幸 国立精神・神経医療研究センター

有用性の高い新薬の開発を行うためには、シーズの特性、アンメットニーズの的確な把握、ゴールを目指した適切な開発戦略のベストマッチが必要である。しかし、現実の開発では、必ずしもこれらの要素を一貫性をもって計画されてきたとは言えない面がある。その理由の一つとして、開発戦略構築の初期段階で産と学の意見交換が十分行われてこなかった点があげられる。そこで、本企画では、シグマアンタゴニストの開発を題材にして、開発の最初期段階を想定した”仮想の”開発戦略会議という形式で、産・学それぞれが忌憚なく意見を交換する場としたい。

S16-1 シグマアンタゴニストNE-100の非臨床試験

茶木 茂之 大正製薬(株)医薬研究本部
 橋本 謙二 千葉大学社会精神保健教育研究センター

S16-2 σ 1受容体アンタゴニストNE-100の開発

森尾 保徳 国立精神・神経医療研究センター
 住吉 太幹 国立精神・神経医療研究センター

S16-3 発展的精神科医療を目指した σ 1受容体アンタゴニスト NE-100の開発戦略

中村 洋 大日本住友製薬株式会社メディカルアフェアーズ部
 渡邊衡一郎 杏林大学医学部精神神経科学教室

指定討論者 中林 哲夫 医薬品医療機器総合機構

指定討論者 山田 光彦 国立精神・神経医療研究センター

精神神経疾患へのTMSと期待される可能性

A Future Perspective on TMS as Neuromodulation for Psychiatric Disorders

オーガナイザー・座長：鬼頭 伸輔 東京慈恵会医科大学精神医学講座
座長：野田 賀大 慶應義塾大学医学部精神神経科学講座

2017年9月、わが国でも反復経頭蓋磁気刺激 (repetitive transcranial magnetic stimulation, rTMS) が治療抵抗性うつ病への治療法として承認された。本シンポジウムでは、いまだ国内では研究段階であるが、今後、臨床応用が期待される領域について論じる。初めに、自閉スペクトラム症の病態生理に着目したrTMSの臨床応用の可能性について論じる。双極性障害抑うつエピソードは国内外未承認であるが、わが国で先進医療制度を利用した世界初の検証的試験を試みる。その概要を報告する。米国では、2018年8月、intermittent theta burst (iTBS) が治療抵抗性うつ病への治療法として認可された。そのエビデンスとなった臨床研究について概説する。2018年8月、強迫性障害への新規治療法としてdeep TMS (dTMS) が米国で認可された。その可能性について論じる。

S17-1 自閉スペクトラム症への新しいアプローチ：rTMSの有用性と病態解明のための磁気刺激-脳波同時測定(transcranial magnetic stimulation - electroencephalogram: TMS-EEG)研究

増田 史 慶應義塾大学医学部精神神経科

S17-2 薬物療法に反応しない双極性障害抑うつエピソードへの反復経頭蓋磁気刺激の有効性と安全性：無作為化二重盲検並行群間比較試験

鬼頭 伸輔 東京慈恵会医科大学精神医学講座

S17-3 治療抵抗性うつ病へのiTBSの有効性と安全性－THREE-D試験の結果から－

野田 賀大 慶應義塾大学医学部精神神経科学教室

S17-4 治療抵抗性強迫症へのdTMSの有効性と安全性

中前 貴 京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学

情動のレギュレーターとしての内感覚情報

Visceral and interoceptive information shapes emotional experience

オーガナイザー・座長：加藤 総夫 東京慈恵会医科大学神経科学研究部
座長：松岡 豊 国立がん研究センター社会と健康研究センター

情動の形成には、感覚、記憶、認知などの多様な因子が関与しているが、その形成においておそらくは極めて重要な役割を果たしているのが内環境情報である可能性は、従来の多くの研究により示唆されてきたが、近年の脳機能画像化および人工的神経活動操作法などによってその生物学的実体が明らかにされつつある。本シンポジウムでは、ヒトとモデル動物を対象にしてこの問題に挑む研究者を2名ずつ集め、特に、扁桃体、島皮質、などを中心とした内感覚情報・内臓感覚などによって活性化される脳活動に関与する神経解剖学・生理学的基盤を明らかにするとともに、その知見を基にした臨床における介入について最新のデータを紹介するとともに論じる。

- S18-1** 内環境情報伝送経路としての腕傍核－扁桃体路の意義
加藤 総夫 東京慈恵会医科大学医学部神経科学研究部
- S18-2** 情動を支える自律神経機能と内受容感覚
梅田 聡 慶應義塾大学文学部心理学研究室
- S18-3** 脳－肝軸：転写因子PPAR γ の肝臓発現は迷走神経を介して高脂肪食誘発不安様行動をレギュレートする
関口 正幸 国立精神・神経医療研究センター神経研究所疾病研究第4部
- S18-4** 栄養成分オメガ3系脂肪酸と不安症状
松岡 豊 国立がん研究センター社会と健康研究センター健康支援研究部

「自閉症スペクトラム症の病態仮説」と治療戦略

Pathological possibilities in autism spectrum disorder; relation to therapy

オーガナイザー・座長：油井 邦雄 藤田医科大医学部腎泌尿器外科学講座
座長：橋本 謙二 千葉大学社会精神保健教育研究センター

近年、自閉症スペクトラム症(ASD)の病態研究と治療戦略が大幅に進展してきた。ASDは複合的病態による発達障害とされ、その基盤に遺伝子の異常が想定されているが、脳機能の発達過程でのシグナリングの偏倚が病態を生成していることは周知の事実である。本シンポジウムでは現時点で提示されている各様の病態仮説とそれに基づく治療戦略を提示し、今後のASD治療を検討したい。

S19-1 自閉症スペクトラム症の病態仮説と治療戦略への展望

油井 邦雄 藤田医科大学医学部腎泌尿器外科学講座(結節性硬化症ボード)

S19-2 自閉スペクトラム症に対する抗酸化剤N-acetylcysteineの予防効果の可能性：環境刺激の観点から見た病態解明と予防戦略

小野田淳人 名古屋大学医学部小児科 / 日本学術振興会特別研究員PD

S19-3 脳発達と社会性行動におけるアストロサイトCD38の役割

服部 剛志 金沢大学医薬保健研究域医学系神経解剖学

S19-4 CHD8変異マウスにおけるASD発症メカニズム

片山 雄太 九州大学生体防御医学研究所分子医科学分野

指定討論者 橋本 謙二 千葉大学社会精神保健教育研究センター病態解析研究部門

オピオイド適正使用に向けた薬剤師の取り組み

Approach to appropriate use of opioids by pharmacists

オーガナイザー・座長：中川 貴之 京都大学医学部附属病院薬剤部
座長：高瀬 久光 日本医科大学多摩永山病院薬剤部

近年、米国ではオピオイドの不適正使用(乱用・麻薬依存)が蔓延し、2015年にはオピオイド過量摂取による死亡者が3.3万人を越えるなど、大変深刻な事態となった(オピオイドクライシス)。幸い国内ではそのような事態には陥っていないが、オピオイドの慢性痛への適応拡大が進む中、一層、オピオイド適正使用に向けた取り組みが求められる。本シンポジウムでは、オピオイドの適正使用に焦点をあて、米国オピオイドクライシスや国内でのオピオイド適正使用の現状について医師からお話し頂いた後、がん患者におけるオピオイドを含むポリファーマシーと薬剤師介入による減処方現状とその効果に関する全国アンケート調査、および前向き観察研究の結果を報告するとともに、医薬品副作用データベース解析によるオピオイドの副作用、特に呼吸抑制や死亡といった重篤な副作用の変遷の解析結果などを報告する。オピオイド乱用や依存に興味を持つ薬剤師の本学会への参入の一助になればと考えている。

S20-1 痛み治療におけるオピオイド鎮痛薬の位置づけを考える
～オピオイド鎮痛薬を適切に使用するために～

上野 博司 京都府立医科大学附属病院疼痛緩和医療部

S20-2 緩和ケア領域におけるポリファーマシーの現状と病院/薬局薬剤師の介入実態に関する
全国アンケート調査

中川 貴之 京都大学医学部附属病院薬剤部

S20-3 緩和医療におけるポリファーマシーに対する薬剤師の介入に関する多施設前向き観察研究

内田まよこ 大阪薬科大学臨床薬学教育研究センター

S20-4 我が国の大規模医薬品副作用データベースJADERに基づくオピオイド関連有害事象の解析

菅原 英輝 鹿児島大学病院薬剤部

抑肝散だけではない、認知症の行動・心理症状(BPSD)に対する漢方薬

Kampo medicine other than yokukansan for behavioral and psychological symptoms of dementia (BPSD)

オーガナイザー・座長：山田 和男 東北医科薬科大学病院精神科
座長：岩崎 克典 福岡大学薬学部臨床疾患薬理学教室

認知症の行動・心理症状(BPSD)に対する漢方治療としては抑肝散が有名であるが、実際の臨床場面では、それ以外の漢方薬が奏効することも多い。そもそも抑肝散は、BPSDのうちの興奮関連症状には奏効するが、不眠やアパシー、食欲不振などに対してはほとんど効果がない。認知症の不眠に対しては、抑肝散よりも酸棗仁湯が有効である場合が多い。また、認知症のアパシーや食欲不振に対しては、人参養栄湯が奏効することが多い。その他、漢方専門医たちは、さまざまな漢方薬を漢方医学的な“証”に応じて使い分けている。本シンポジウムでは、これらの漢方薬のうち、酸棗仁湯と人参養栄湯の認知症のBPSDへの効果について、基礎・臨床の両面からの知見を紹介するとともに、認知症治療における漢方薬の役割について議論する予定である。認知症のBPSDに対する酸棗仁湯と人参養栄湯の効果に関して、基礎・臨床の両面から切り込んでいきたい。

- S21-1** 認知症高齢者と漢方：
アルツハイマー型認知症患者の食欲不振やアパシーに対する人参養栄湯の効果
大澤 誠 大井戸診療所
- S21-2** 人参養栄湯の神経薬理学的作用機構—ドーパミン神経系を中心に—
大宮 雄司 株式会社ツムラ漢方研究開発本部ツムラ漢方研究所
- S21-3** 酸棗仁湯に関する臨床医学的な知見
宮岡 剛 医療法人青葉会松江青葉病院
- S21-4** アルツハイマー型認知症患者の睡眠障害に対する酸棗仁湯の効果—モデル動物を用いた研究—
岩崎 克典 福岡大学薬学部臨床疾患薬理学教室

統合失調症とその関連疾患のエンドフェノタイプ

Pathway from divergent etiologies to convergent endophenotypes in schizophrenia

オーガナイザー・座長：宮川 剛

藤田医科大学総合医科学研究所

座長：Robert McCullumsmith

Department of Neuroscience, University of Toledo, USA

統合失調症や双極性障害などの精神疾患では、多種多様な遺伝的要因と環境要因が危険因子となっていると考えられている。個々の患者が独自の遺伝子多型・変異のセットと各種ライフイベントや感染・炎症などの経験のユニークな組み合わせを有している一方で、それが共通の症状に帰結するわけだが、この間には患者間で共有される何らかの共通の病態が存在するはずである。近年の研究から、そのような脳内の「中間表現型」の候補として、シナプスの異常、細胞の成熟度異常、領域間結合の異常、慢性炎症などが挙げられている。では、多様な病因のセットから中間表現型に至るパスウェイに何らかの原理・原則は存在するのだろうか？本シンポジウムでは、3名の演者が神経回路の過剰興奮やエネルギー代謝異常に焦点を当てた講演を行う。さらに、その道筋を統一的に理解できる仮説を構築することが可能かどうかについて議論を行う。

S22-1 神経過活動によって誘導される未成熟様の遺伝子発現パターンは複数の精神神経疾患に共通してみられる

村野 友幸 藤田医科大学総合医科学研究所システム医科学部門

S22-2 精神疾患のエンドフェノタイプとしての脳神経細胞の機能的成熟の異常

小林 克典 日本医科大学薬理学

S22-3 Bioenergetic defects in severe mental illness: identification of novel etiologies that may be targeted with repurposed drugs

Robert McCullumsmith Department of Neurosciences, University of Toledo, Toledo, OH, USA

指定討論者 松本 光之 アステラス製薬株式会社

分子イメージングを用いた向精神薬評価の新たな展開
Update in molecular imaging of psychotropic drugs

オーガナイザー・座長：大久保善朗 日本医科大学大学院精神行動医学
座長：須原 哲也 国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所

Positron Emission Tomography (PET) は、ポジトロン放出核種で標識した各種の化合物をプローブとして生体に投与し、その経時的な動態や体内分布を体外から計測する分子イメージング技術である。PETを用いて向精神薬の評価する際には、生体内で調査対象薬剤が受容体やトランスポーターに結合している程度をPETトレーサーの特異結合の減少の程度、すなわち、占有率として指標にする方法が用いられる。ドパミンD2受容体占有率を指標にした抗精神病薬の至適用量の設定など、これまでに大きな成果をあげてきた。本シンポジウムでは、分子イメージングを用いた向精神薬評価研究の最新の動向として、セロトニントランスポーター、ノルエピネフィリントランスポーターそしてドパミンD2,D3受容占有率を指標にした抗うつ薬または抗精神病薬の評価研究を紹介する。

S23-1 セロトニントランスポーター占有率による抗うつ薬の評価

荒川 亮介 カロリンスカ研究所臨床神経科学部門 / 日本医科大学精神医学教室

S23-2 分子イメージングバイオマーカーに基づく新しい治療選択：
プレシジョンメディスンの実現に向けて

高畑 圭輔 量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所脳機能イメージング研究部 /
慶應義塾大学医学部精神神経科学教室

S23-3 ドパミンD₂ならびにD₃受容体占有率を指標とした抗精神病薬の作用評価

館野 周 日本医科大学精神医学

日本神経精神薬理学会 学術奨励賞受賞講演

NP学術奨励賞受賞講演

10月13日(日) 8:20 ~ 10:20 第15会場(福岡サンパレスホテル&ホール 2F パレスルームB)

座長：大森 哲郎 徳島大学大学院医歯薬学研究所精神医学分野

NEN1

精神疾患の中間表現型を用いたゲノム研究

大井 一高 岐阜大学大学院医学系研究科精神病理学

NEN2

恐怖記憶が長期間持続する神経回路機構の解明

野村 洋 北海道大学大学院薬学研究院薬理学研究室

JSNP

学術奨励賞受賞講演

一般演題 (口演)

口演1

10月12日(土) 8:40 ~ 10:20 第8会場(404)

認知症、神経科学

座長： 糸川 昌成 公益財団法人東京都医学総合研究所
猿渡 淳二 熊本大学大学院生命科学研究部薬物治療学分野

O1-1 中枢ヒスタミンによる記憶の想起障害の改善

野村 洋 北海道大学大学院薬学研究院薬理学研究室

O1-2 APC-100、低分子化合物によるアルツハイマー病の神経再生治療薬

菅谷 公伸 中央フロリダ大学医学部

O1-3 パーキンソン病患者 iPS 細胞由来 GABA 神経細胞を用いたパーキンソン病の病態解析

香川 玲子 星薬科大学薬理学研究室

O1-4 ラット脳膜標品における³⁵S]GTP γ S binding/immunoprecipitation assayの再確立

小田垣雄二 埼玉医科大学医学部

O1-5 集団飼育ホームケージ内におけるFMR1欠損マウスの自閉スペクトラム症様行動表現型

ベナー 聖子 浜松医科大学医学部精神医学講座

O1-6 プロテオミクスが解き明かす自閉症スペクトラム障害とてんかんに共通する分子病態基盤

坪井 大輔 名古屋大学大学院医学系研究科神経情報薬理学講座

O1-7 ドーパミン生成能と、ドーパミン再取り込み機能およびドーパミンD₂受容体密度との関連性に関する検討

山本 保天 量子科学技術研究開発機構量子医学・医療部門放射線医学総合研究所脳機能イメージング研究部 / 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

口演2

10月12日(土) 10:30 ~ 12:10 第8会場(404)

統合失調症関連

座長： 奥川 学 関西記念病院
池田 和仁 大日本住友製薬株式会社

O2-1 行動変容への意思決定理論的なアプローチ

松森嘉織好 玉川大学脳科学研究所

O2-2 統合失調症の精神刺激薬動物モデルでは、末梢血液で複数の免疫・炎症因子の異常が認められる

伊藤 侯輝 北海道大学病院精神科神経科

O2-3 Electronic adherence monitoring (EAM)で測定した統合失調症の服薬アドヒアランス：システムティックレビューとメタアナリシス

八重樫穂高 山梨県立北病院

O2-4 日本人を対象とした実臨床データ及びメタアナリシスに基づく非定型抗精神病薬の治療戦略に関する費用対効果評価

村田 篤信 慧真会協和病院薬剤科

O2-5 精神科専門研修における抗精神病薬処方適正化の教育方法について

市橋 香代 東京大学医学部附属病院精神神経科

JSNP

一般演題 (口演)

O2-6

統合失調症におけるクロザピン治療と抗精神病薬単剤治療の関連
～EGUIDEプロジェクトの処方調査の結果から～

長谷川尚美 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部

O2-7

クロザピン抵抗性の統合失調症に修正型電気けいれん療法の併用が有効であった一例。

白土 俊明 社会医療法人如月会若草病院

□演3

10月13日(日) 8:40～10:20 第10会場(406)

双極性障害、神経科学

座長： 辻野 尚久 東邦大学医学部精神神経医学講座
梶井 靖 武田薬品工業T-CiRAディスカバリー

O3-1

演題取り下げ

O3-2

精神神経疾患のトランスレーショナル研究ツールとしてのiMG(induced microglia-like)細胞

扇谷 昌宏 九州大学大学院医学研究院精神病態医学分野

O3-3

治療抵抗性統合失調症の自閉症的特性とオキシトシン系システム障害：
寛解統合失調症および自閉症スペクトラム障害との神経心理学的・遺伝学的比較検討

仲田 祐介 千葉大学医学部医学研究院精神医学

O3-4

大脳白質の成熟性と社会機能の指標である労働時間との関連

松本 純弥 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部

O3-5

双極性障害では線条体におけるホスホジエステラーゼ10Aの密度が低下する

佐野 康徳 量子科学技術研究開発機構量子医学・医療部門放射線医学総合研究所脳機能イメージング研究部 /
慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

O3-6

双極性障害患者における血清中エタノールアミンプラズマローゲンおよび
ホスファチジルエタノールアミン濃度の変化

小川真太郎 国立精神・神経医療研究センター神経研究所疾病研究第三部

O3-7

バルプロ酸投与中の双極性障害患者におけるカルニチン欠乏症について

石井沙安也 獨協医科大学病院精神神経科学講座

JSNP

一般演題
(口演)

ポスター発表

10月12日(土) 17:25 ~ 18:10 ポスター会場(福岡国際会議場 2階 多目的ホール)
10月13日(日) 16:40 ~ 18:10 ポスター会場(福岡国際会議場 2階 多目的ホール)

ポスター1 うつ病、神経科学

10月12日(土) 17:25 ~ 18:10

座長： 前原 俊介 持田製薬株式会社

- P1-1 うつ病モデル動物：嗅球摘出ラットの行動変化におけるアデノシンA1受容体作動薬 N6-シクロペンチルアデノシンの作用
後藤 玲央 福岡大学医学部精神医学教室ニューロサイエンス・精神医学研究講座 / 福岡大学医学部精神医学教室
- P1-2 うつ病モデル動物における扁桃体FKBP5の発現様式
鹿内 浩樹 北海道医療大学薬学部薬理学講座
- P1-3 幼若期薬理学的ストレス負荷による成長後の抑うつ様行動に対する選択的セロトニン再取り込み阻害薬フルボキサミンの効果
新地 瑠海 長崎国際大学薬学部薬物治療学研究室
- P1-4 慢性痛モデルマウスにおけるレゾルビンD1およびレゾルビンD2の抗うつ効果
鈴木 博恵 北海道大学薬学部薬理学研究室
- P1-5 Shati/Nat8l線条体局所的ノックダウンマウスにおけるBdnf遺伝子のアセチル化制御を介したうつ病発症に対する抵抗性の形成
宮西 肇 富山大学大学院医学薬学研究部薬物治療学研究室

ポスター2 双極性障害、うつ病

10月13日(日) 16:40 ~ 18:10

座長： 内野 茂夫 帝京大学理工学部バイオサイエンス学科

- P2-1 マウス前頭前皮質におけるTeneurin-4の発現減少によるうつ行動への関与
所 一輝 富山大学医学薬学教育部薬物治療学研究室
- P2-2 双極性障害の病態メカニズム解明に向けてのTeneurin-4の機能解析研究
中野 史崇 富山大学薬学部薬物治療学研究室
- P2-3 学習性無力ラットにおけるグルタミン酸トランスポーターとグルタミン合成酵素
吉野 晃平 千葉大学大学院医学研究院精神医学
- P2-4 脳由来神経栄養因子(BDNF)遺伝子多型と人格特性および不安特性における関連研究
鈴木 玖実 麻布大学大学院環境保健学研究科環境保健科学専攻精神機能学分野
- P2-5 新生仔期MK-801慢性投与によるNMDA受容体遮断はラットの摂餌行動における社会的促進を障害する
古家 宏樹 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神薬理研究部

JSNP

一般演題
(ポスター)

座長： 永安 一樹 京都大学大学院薬学研究科

- P3-1** 骨基質蛋白質オステオポンチン誘導物質の覚醒剤依存形成への影響
 中島 卓海 富山大学医学薬学教育部薬物治療学研究室
- P3-2** メタンフェタミン退薬後の認知機能障害発現における内因性カンナビノイドシステムの関与
 福森 良 長崎国際大学薬学部薬物治療学研究室
- P3-3** 内側前頭前皮質から中脳水道周囲灰白質への神経投射は葛藤環境における報酬探索行動を促進する。
 本宿 雄基 北海道大学薬学部薬理学分野
- P3-4** 日本人におけるドーパミンD2受容体遺伝子とアルコール依存症との関連研究
 戸上 樹音 麻布大学大学院環境保健学研究科環境保健科学専攻精神機能学分野
- P3-5** 日本人におけるoxytocin receptor遺伝子多型とアルコール依存症との関連研究
 宮本真起子 麻布大学環境保健学研究科環境保健科学専攻精神機能学分野

座長： 野村 洋 北海道大学大学院薬学研究院薬理学研究室

- P4-1** アルツハイマー病患者の脳内で発現が減少するアミノ酸 N-acetyl-aspartate (NAA) がマウス由来アストロサイトにおいてニコチン性アセチルコリン受容体 $\alpha 7$ サブユニットの発現に与える影響
 楠井 優香 富山大学医学薬学教育部薬科学専攻薬物治療学研究室
- P4-2** 老化制御転写因子 Foxo3a とレビー小体病病因遺伝子 α -synucleinを用いた早期老化による認知症モデルマウスの作成
 王 帆 富山大学大学院医学薬学研究部(薬学)・薬物治療研究室
- P4-3** チペピジンはアルツハイマー病モデルマウスの空間認知機能障害を顕著に改善する
 高濱 和夫 熊本保健科学大学
- P4-4** 脳虚血および β -amyloid誘発認知症モデル動物の行動・心理様行動に対する発酵オタネニンジンの効果
 長尾 昌紀 福岡大学加齢脳科学研究所
- P4-5** マウス前頭前皮質における Shati/Nat8l 発現量変化の空間認識機能への関与
 東 克憲 富山大学薬学部薬物治療学研究室

座長： 辻 稔 国際医療福祉大学薬学部薬理学分野

- P5-1** マウスにおける意思決定の客観的及び定量的解析
 鈴木 健 早稲田大学大学院人間科学研究科環境脳科学研究室 / 早稲田大学環境医科学研究所
- P5-2** Appノックインマウスにおける認知機能の時系列変化の評価
 城宝 大輔 早稲田大学大学院人間科学研究科環境脳科学研究室 / 早稲田大学環境医科学研究所
- P5-3** オキシトシン点鼻投与は側坐核 dopamine D1 受容体陽性中型有棘神経細胞を活性化させる
 田中 謙一 星薬科大学薬理学研究室

- P5-4 織毛病関連遺伝子を破壊する変異を持つhTERT-RPE1細胞におけるGタンパク共役型受容体の織毛局在
三好 耕 大阪大学連合小児発達学研究所分子生物遺伝学研究領域 / 大阪大学連合小児発達学研究所子どものこころの分子統御機構研究センター
- P5-5 女神散は卵巣摘出による運動量の低下を改善する
古川 恵 横浜薬科大学薬学教育センター
- P5-6 D-ニューロン(トレースアミンニューロン1型)の細胞組織化学の普遍化は急務である
池本 桂子 いわき市医療センター精神科(リエゾン科)

ポスター6 統合失調症

10月13日(日) 16:40 ~ 18:10

座長: 池本 桂子 いわき市医療センター

- P6-1 統合失調症治療に対する治療ガイドライン教育プロジェクト(EGUIDEプロジェクト)の効果: 報告1-過去2年の受講者のガイドラインに基づく治療行動実践度の変化からの考察—
山田 恒 兵庫医科大学精神科神経科学講座 / 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部
- P6-2 統合失調症に対する治療ガイドライン教育プロジェクト(EGUIDEプロジェクト)の効果: 報告2-過去2年の参加施設のガイドラインに基づく治療行動実践度の変化からの考察—
本山美久仁 兵庫医科大学精神科神経科学講座
- P6-3 統合失調症の現在IQ・病前IQより推定する知的機能低下: Schizophrenia Non-Affected Relative Project (SNARP)
大井 一高 金沢医科大学精神神経科学 / 金沢医科大学総合医学研究所
- P6-4 統合失調症患者と非罹患第1度近親者の社会機能障害
嶋田 貴充 金沢医科大学精神神経科学 / 岡部病院
- P6-5 統合失調症患者、非罹患第1度近親者および健常者間の遂行機能の差異について
片岡 譲 金沢医科大学医学部精神神経科学

ポスター7 ADHD、抗精神病薬

10月13日(日) 16:40 ~ 18:10

座長: 河原 幸江 久留米大学医学部薬理学講座

- P7-1 認知的柔軟性の顕在的・潜在的側面と安静時脳活動について
藤野 純也 昭和大学発達障害医療研究所 / 京都大学大学院医学研究科精神医学教室
- P7-2 日本における成人の注意欠如・多動症患者に対するグアンファシン徐放錠の有効性と安全性: フェーズ3ランダム化二重盲検プラセボ対照試験
岩波 明 昭和大学医学部精神医学講座
- P7-3 日本における成人の注意欠如・多動症患者に対するグアンファシン徐放錠の安全性と有効性: フェーズ3オープンラベル長期投与試験
岩波 明 昭和大学医学部精神医学講座
- P7-4 Blonanserinテープ製剤の血漿中薬物濃度と脳内ドパミンD₂受容体占有率—実臨床を想定したシミュレーション—
北村 敦 大日本住友製薬株式会社開発本部臨床企画部
- P7-5 ロナセンテープの製剤設計
田中 雅康 大日本住友製薬株式会社技術研究本部製剤研究所

JSNP

一般演題
(ポスター)

座長： 鶴飼 渉 札幌医科大学医学部神経精神医学講座

- P8-1** 神経過活動によって誘導される未成熟様の遺伝子発現パターンは複数の精神神経疾患に共通してみられる
村野 友幸 藤田医科大学総合医科学研究所システム医科学部門
- P8-2** メタンフェタミン反復投与による統合失調症病態モデル動物におけるNMDA受容体の構成パターンに着目した病態研究
岡 松彦 北海道大学大学院医学研究院
- P8-3** 向精神薬の行動学試験に用いられるvehicle自体の攻撃行動抑制作用：DMSOとオリーブオイルに潜む危険
口岩 俊子 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科形態科学 / 鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科心理臨床学
- P8-4** マウス・ラット用新規小型全自動薬液投与デバイスの開発
遠藤 俊裕 フェノバンス・リサーチ・アンド・テクノロジー合同会社 / 筑波大学 医学医療系
- P8-5** 幼若期マウスにおける集団飼育ホームケージ環境下全自動認知行動試験法の確立
遠藤 俊裕 フェノバンス・リサーチ・アンド・テクノロジー合同会社 / 筑波大学医学医療系

座長： 池田 弘子 星薬科大学薬物治療学研究室

- P9-1** 慢性社会的挫折ストレスモデルマウスにおいて乳酸産生阻害剤の投与は不安様行動を悪化させる
萩原 英雄 藤田医科大学総合医科学研究所システム医科学研究部門
- P9-2** 社会的敗北ストレス負荷マウスを用いたリルゾールの抗ストレス効果についての検討
石井 香織 東京理科大学薬学部薬学科疾患薬理学研究室 / 国立精神・医療研究センター精神保健研究所精神薬理研究部
- P9-3** 慢性ストレスによる背外側分界条床核神経伝達の可塑的变化
原 隆人 北海道大学薬学部薬理学研究室
- P9-4** D-セリン制御と神経新生抑制による遠隔恐怖記憶の消去
井上 蘭 富山大学大学院医学薬学研究部分子神経科学講座
- P9-5** 慢性痛による拡張扁桃核神経回路の可塑的变化は不安を惹起する
山内 直紀 北海道大学大学院薬学研究院薬理学研究室

座長： 戸田 重誠 昭和大学医学部精神医学講座

- P10-1** 背外側分界条床核へ投射する扁桃体中心核神経細胞における神経ペプチドmRNAの組織学的発現解析
新垣 紗也 北海道大学薬学部薬理学研究室
- P10-2** ヒスタミンH1受容体拮抗薬処置マウスにおけるタッチスクリーン型5-選択反応時間課題を用いた注意機能の評価
廖 婧竹 名古屋大学大学院医学系研究科医療薬学

P10-3

IPS細胞を用いた神経発達障害の分子病態の解明

豊島 学 理化学研究所脳神経科学研究センター分子精神遺伝研究チーム

P10-4

自閉スペクトラム症病態モデルマウスにおける探索・情動・社会性行動解析

清水 仁美 帝京大学理工学部バイオサイエンス学科

P10-5

オレキシン2型受容体選択的作動薬TAK-925は、マウス及び霊長類において覚醒を誘導し、ナルコレプシーモデルマウスの症状を改善する

木村 温英 武田薬品工業株式会社リサーチニューロサイエンス創薬ユニット

ポスター 11 抗精神病薬

10月13日(日) 16:40 ~ 18:10

座長： 小田垣雄二 埼玉医科大学医学部神経精神科・心療内科

P11-1

急性増悪期の統合失調症患者を対象としたルラシドンの6週間プラセボ対照二重盲検並行群間比較による第3相検証的試験(JEWEL試験)の成績

伊豫 雅臣 千葉大学大学院医学研究院精神医学

P11-2

演題取り下げ

P11-3

ルラシドンの抑うつエピソードを伴う双極Ⅰ型障害患者を対象とした検証的試験(ELEVATE試験)の成績(有効性)

加藤 忠史 理化学研究所脳神経科学研究センター精神疾患動態研究チーム

P11-4

ルラシドンの抑うつエピソードを伴う双極Ⅰ型障害患者を対象とした検証的試験(ELEVATE試験)の成績(安全性/忍容性)

樋口 輝彦 日本うつ病センター / 国立精神・神経医療研究センター

P11-5

ルラシドンの抑うつエピソードを伴う双極Ⅰ型障害患者を対象とした長期投与試験(ELEVATE継続投与試験)の成績

石郷岡 純 CNS薬理研究所

JSNP

一般演題
(ポスター)

ランチオンセミナー
スポンサーードシンポジウム

ランチョンセミナー

ランチョンセミナー 1-1

10月11日(金) 12:30 ~ 14:00 第1会場(メインホール)

共催：ルンドベック

※講演言語：英語
※同時通訳あり

Chair : Stephen Stahl University of California San Diego, California, USA

LS1-1-1 Understanding Depression Treatment: from Mechanism to Clinical Profile

Stephen STAHL University of California San Diego, California, USA

LS1-1-2 Do Patients Receive the Treatment They Really Need?

Bernhard T. BAUNE University of Münster, Münster, Germany

LS1-1-3 Back to Normal?

Roger MCINTYRE University of Toronto, Toronto, Ontario, Canada

ランチョンセミナー 1-4

10月11日(金) 12:30 ~ 13:30 第4会場(409)

共催：大塚製薬株式会社

座長：古郡 規雄 獨協医科大学精神神経医学講座

LS1-4-1 カルニチン欠乏を伴う肝硬変における脳機能異常
—近赤外線光トポグラフィー (NIRS) での検討から

中西 裕之 武蔵野赤十字病院消化器科

LS1-4-2 精神科におけるカルニチン欠乏とカルニチン補充療法の有用性

中村 明文 あかりクリニック / 琉球大学大学院精神病態医学講座

ランチョンセミナー 1-6

10月11日(金) 12:30 ~ 13:30 第6会場(401+402)

共催：第一三共株式会社 / ユーシービージャパン株式会社

座長：渡邊 裕喜 天久台病院精神科

LS1-6 高齢者てんかんをめぐって

吉野 相英 防衛医科大学校精神科

ランチョンセミナー 1-13

10月11日(金) 12:30 ~ 13:30 第13会場(501)

共催：大日本住友製薬株式会社メディカルアフェアーズ部

※講演言語：英語
※同時通訳あり

座長：中込 和幸 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター

LS1-13 Cognitive Dysfunction in Bipolar Disorder

Allan H. YOUNG King's College London, London, UK

ランチョンセミナー 1-14 10月11日(金) 12:30 ~ 13:30 第14会場(パレスルームA)

共催：田辺三菱製薬株式会社

座長：内田 裕之 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

LS1-14 あらためて遅発性ジスキネジアの診断と治療を考える

坪井 貴嗣 杏林大学医学部精神神経科学教室

ランチョンセミナー 1-15 10月11日(金) 12:30 ~ 13:30 第15会場(パレスルームB)

共催：ファイザー株式会社 / 大日本住友製薬株式会社

座長：河西 千秋 札幌医科大学医学部神経精神医学教室

LS1-15 うつ病診療における治療脱落を考える

岩田 仲生 藤田医科大学医学部精神神経科学講座

ランチョンセミナー 2-1 10月12日(土) 12:30 ~ 13:30 第1会場(メインホール)

共催：大日本住友製薬株式会社

座長：樋口 輝彦 一般社団法人日本うつ病センター

LS2-1 統合失調症薬物治療における第3の投与経路“経皮吸収”がもたらす可能性

石郷岡 純 CNS薬理研究所

ランチョンセミナー 2-2 10月12日(土) 12:30 ~ 13:30 第2会場(411+412)

共催：大塚製薬株式会社

※講演言語：英語

座長：尾崎 紀夫 名古屋大学大学院医学系研究科精神医学・親と子どもの診療学分野

LS2-2 Recent developments and future perspectives of long-acting injectable antipsychotics in schizophrenia

Andrea FAGIOLINI Department of Mental Health and Division of Psychiatry, University of Siena School of Medicine, Italy

ランチョンセミナー 2-3 10月12日(土) 12:30 ~ 13:30 第3会場(413+414)

共催：日本イーライリリー株式会社 / 塩野義製薬株式会社

座長：三村 将 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

LS2-3 うつ病治療の最適化を目指して
—その異種性をいかにして捉え、いかに治療に反映させるか—

大坪 天平 東京女子医科大学東医療センター精神科

ランチョンセミナー 2-5 10月12日(土) 12:30 ~ 13:30 第5会場(410)

共催：帝人ファーマ株式会社

座長：中込 和幸 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター

LS2-5 うつ病へのニューロモデュレーション：rTMS

鬼頭 伸輔 東京慈恵会医科大学精神医学講座

ランチョンセミナー 2-6

10月12日(土) 12:30 ~ 13:30 第6会場(401+402)

共催：日本新薬株式会社

座長：齋藤 利和 医療法人北仁会幹メンタルクリニック /
札幌医科大学医学部神経精神医学講座

LS2-6

アルコール依存症治療の新時代：アカンプロサートの薬理を中心に
廣中 直行 帝京大学文学部心理学科

ランチョンセミナー 2-11

10月12日(土) 12:30 ~ 13:30 第11会場(502)

共催：共和薬品工業株式会社 / 吉富薬品株式会社

座長：近藤 毅 琉球大学大学院医学研究科精神病態医学講座

LS2-11

エビデンスと文脈から紐解く、気分障害における目標に適した薬物療法
加藤 正樹 関西医科大学医学部精神神経科学講座

ランチョンセミナー 2-12

10月12日(土) 12:30 ~ 13:30 第12会場(503)

共催：フィリップ モリス ジャパン合同会社

※講演言語：英語

※同時通訳あり

座長：井手聡一郎 東京都医学総合研究所依存性薬物プロジェクト

LS2-12

The role of Heat-Not-Burn products in Tobacco Harm Reduction: approach based on the example of IQOS® in Japan

Patrick PICALET PMI R&D, Philip Morris Products S.A., Neuchâtel, Switzerland

Serge MAEDER PMI R&D, Philip Morris Products S.A., Neuchâtel, Switzerland

ランチョンセミナー 2-13

10月12日(土) 12:30 ~ 13:30 第13会場(501)

共催：エーザイ株式会社

※講演言語：英語

座長：武田 雅俊 大阪河崎リハビリテーション大学認知予備力研究センター /
仁明会精神衛生研究所

LS2-13

Alzheimer's disease: The Approach for disease modification

小野賢二郎 昭和大学医学部内科学講座脳神経内科学部門

座長：岩田 仲生 藤田医科大学医学部精神神経科学講座

LS2-15-1

Opportunities in the treatment and prevention of positive symptoms: improving outcomes

John M. KANE Behavioral Health Services, Northwell Health, New York, USA,
The Donald and Barbara Zucker School of Medicine, Hofstra/Northwell, New York, USA,
The Zucker Hillside Hospital, Department of Psychiatry, New York, USA

LS2-15-2

Challenges and progress in the treatment of negative, cognitive, and other symptom domains

Christoph U. CORRELL Department of Psychiatry and Molecular Medicine, Hofstra Northwell School of Medicine, New York, USA,
Center for Psychiatric Neuroscience, Feinstein Institute for Medical Research, New York, USA,
Recognition and Prevention (RAP) Program, The Zucker Hillside Hospital, Department of Psychiatry, New York, USA

Chairs : Chan Hyung Kim Vice-president, AsCNP/ Department of Psychiatry, Yonsei University College of Medicine, Korea

池田 和隆 第6回アジア神経精神薬理学会会長 / President, AsCNP / 東京都医学総合研究所精神行動医学研究分野

ALS-1

Introduction of AsCNP

新田 淳美 Secretary of Central Office, AsCNP / 富山大学大学院医学薬学研究部(薬学)・薬物治療学研究室

ALS-2

AsCNP2021 Singapore Congress

Chay Hoon TAN President-elect, AsCNP/ National University of Singapore, Singapore

ALS-3

Award Committee

Shih-Ku LIN Vice-president, AsCNP/ Taipei City Hospital and Psychiatric Center, Taiwan

ALS-4

Education Committee

Andi J. TANRA Past-president, AsCNP/ University of Hasanuddin, Indonesia

ALS-5

AFPA & Asia alliance

Winston W. SHEN Adviser, AsCNP/ Department of Psychiatry, Taipei Medical University, Taiwan
新福 尚隆 神戸大学医学部

ALS-6

Related Academic Societies

池田 和隆 第6回アジア神経精神薬理学会会長 / President, AsCNP / 東京都医学総合研究所精神行動医学研究分野

ランチョンセミナー 3-2

10月13日(日) 12:30～13:30 第2会場(411+412)

共催：Meiji Seika ファルマ株式会社

座長：松本 俊彦 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所
薬物依存研究部 / 病院薬物依存症センター

LS3-2

>500本の臨床試験から見てきた抗うつ剤の真の姿：
抗うつ剤の間には有効性の差があるし、プラセボ反応率は25年来増加していないし、
SSRIは標準投与量の中でも低めで投与するのが良い

古川 壽亮 京都大学大学院医学研究科健康増進・行動学分野

ランチョンセミナー 3-6

10月13日(日) 12:30～13:30 第6会場(401+402)

共催：塩野義製薬株式会社 / 武田薬品工業株式会社

座長：中川 伸 山口大学大学院医学系研究科高次脳機能病態学講座

LS3-6

ADHDと双極性障害の合併について

寺尾 岳 大分大学医学部精神神経医学講座

ランチョンセミナー 3-11

10月13日(日) 12:30～13:30 第11会場(502)

共催：持田製薬株式会社 / 田辺三菱製薬株式会社 / 吉富薬品株式会社

座長：大坪 天平 東京女子医科大学東医療センター精神科

LS3-11

不安症とうつ病との関連について ～特に社交不安症(SAD)に着目して～

朝倉 聡 北海道大学保健センター / 北海道大学大学院医学研究院神経病態学分野精神医学教室

ランチョンセミナー 3-14

10月13日(日) 12:30～13:30 第14会場(パレスルームA)

共催：アステラス製薬株式会社

座長：尾崎 紀夫 名古屋大学大学院医学系研究科精神医学・親と子どもの心療学分野

LS3-14

睡眠障害の診断と治療Up date

井上 雄一 東京医科大学睡眠学講座 / 睡眠総合ケアクリニック代々木

ランチョンセミナー 3-15

10月13日(日) 12:30～13:30 第15会場(パレスルームB)

共催：武田薬品工業株式会社ジャパンメディカルオフィス / ルンドベック・ジャパン株式会社メディカルアフェアーズ部

座長：井上 猛 東京医科大学精神医学分野

LS3-15

うつ病治療におけるアンメットニーズに対して取り組む

渡邊衡一郎 杏林大学医学部精神神経科学教室

スポンサードシンポジウム

スポンサードシンポジウム2

10月11日(金) 16:30 ~ 18:10 第2会場(411+412)

共催：ヤンセンファーマ株式会社メディカルアフェアーズ本部

統合失調症の長期予後を見据えた治療

座長：岩田 仲生 藤田医科大学医学部精神神経科学講座
渡邊 衡一郎 杏林大学医学部精神神経科学教室

統合失調症の治療においては急性期から慢性期まで長期にわたり、効果や副作用などを考慮した治療が重要である。統合失調症患者は一般人口より平均寿命が短いと言われているが、治療によって影響があることが報告されている。また統合失調症患者では認知機能の低下が認められ、認知機能は機能的転帰や社会機能に関連するため治療ターゲットとして注目されており、治療によって影響があることが報告されている。近年の脳画像研究のデータの蓄積により、統合失調症患者では脳構造の異常の進行が多いこともわかってきており、治療によって影響があることが報告されている。本シンポジウムでは、統合失調症患者の生命予後、認知機能、脳構造変化とそれらの治療による影響についてそれぞれの観点から、最新の知見を提示し、長期予後を見据えた治療について考える場としたい。

SS2-1 生命予後を見据えた統合失調症薬物治療

三澤 史斉 地方独立行政法人山梨県立病院機構山梨県立北病院

SS2-2 認知機能障害を意識した統合失調症治療

橋本 直樹 北海道大学大学院医学研究院神経病態学分野精神医学教室

SS2-3 脳画像で見た統合失調症の脳構造異常の経時的変化

高橋 英彦 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科精神行動医学

ス
ポ
ン
サ
ー
ド
シ
ン
ポ
ジ
ウ
ム

成人期AD/HDの診断-過剰診断と過少診断-

座長：齊藤 卓弥 北海道大学大学院医学研究院児童思春期精神医学分野

注意欠如/多動症 (AD/HD) は、頻繁で激しい不注意、多動性及び衝動性の3主症状によって定義される精神疾患であり、以前は児童期の障害とされてきたが、1970年代以降、症状が成人期になっても持続することが認められてきた。

児童期のAD/HDの50%～80%は青年期まで、30%～50%は成人期に至るまで持続すると報告されている。

多動は思春期以降に目立たなくなるが、不注意は成人になっても続くことが多く、小児期には見逃されていたAD/HDが、家庭生活や仕事の場面で困難を感じるにより成人後に初めて診断される場合も少なくない。

しかし、成人期のAD/HDの特徴として、二次障害や合併症の併存が多く、AD/HDと併存障害との鑑別診断を困難にしていることに加え、幼少期からの症状の確認が困難であることなどが、適切な診断を難しくしている。

また、最近のコホート研究では、小児期にAD/HDと診断された患者のうち、成人期には寛解に至る例が多いこと、小児期にAD/HDの診断を満たさないにもかかわらず成人期においてAD/HDと診断しうるレベルの多動性・衝動性、不注意が認められる者が多いことが報告された。

そのため、小児期から成人期への連続性に新たな疑問が投げかけられ、そのような背景の中、本シンポジウムでは、成人期AD/HDの適切な診断を行うためにどのように対応するべきか、海外・国内の演者から最新の知見を紹介していただき、議論を深めたい。

SS3-1 成人期ADHDの診断－過剰診断と過小診断－

小野 和哉 聖マリアンナ医科大学神経精神科学教室

SS3-2 成人の注意欠如・多動症の診断ツール

齊藤 卓弥 北海道大学大学院医学研究院児童思春期精神医学分野

SS3-3 Understanding ADHD in adulthood: focus on diagnosis

Josep Antoni RAMOS-QUIROGA Vall d'Hebron University Hospital, Universitat Autònoma de Barcelona, Spain

New treatment, including harm reduction program, for the patients with alcohol dependence

座長：齋藤 利和 医療法人北仁会幹メンタルクリニック /
札幌医科大学医学部神経精神医学講座

The “Basic Act on Measures against Alcohol-Related Health Harm” was enacted in December 2013. It called out to enhance the training for medical staffs and the early diagnosis and treatment for patients with alcohol related problems to resolve the big treatment gap. In these situation, The Japanese Society of Alcohol-Related Problems and The Japanese Medical Society of Alcohol and Addicition Studies published New Diagnosis and Treatment Guidelines for Alcohol and Drug Use Disorders. This guidelined including the harm reduction concept as a treatment goal for alcohol dependence as well susbtance use disorder. Big alteration has been seen in outpatientns treatment by accepting the drinking reduction goal in Japan. Additionally, new pahrmacotherapy for alcohol dependece aiming to reduce in alcohol consmption was lanched in Japan. These changes would be expected to play supportive role for continuing treatment for patients with alcohol dependence both with an/or without of medication.

SS4-1 The new legislation on alcohol-related health harm and the new clinical guidelines for substance use disorders in Japan

樋口 進 久里浜医療センター

SS4-2 Alteration in Diagnosis, Treatment and Treatment Goal for Alcohol Dependence and Alcohol Use Disorders

齋藤 利和 医療法人北仁会幹メンタルクリニック / 札幌医科大学医学部神経精神医学講座

SS4-3 The update of the pharmacological effects of nalmefene and the psychosocial support program: based on the outcomes of clinical trial of nalmefene in Japan (phase III trial)

宮田 久嗣 東京慈恵会医科大学精神医学講座

Motivation, Tobacco, Nicotine

Chairs : Edward F. DOMINO Department of Pharmacology, University of Michigan, USA
宮田 久嗣 東京慈恵会医科大学精神医学講座

New types of tobacco products, which are said to be potentially less harmful than conventional cigarettes, e.g. heat-not-burn tobacco products and e-cigarettes, are getting popular. Toxicological evaluation of the use of these products are being vigorously examined, but research on "addictive" aspects of these products are less. This symposium would provide a good opportunity to examine various aspects of the new products, including their subjective effects.

SS5-1 Motivation Measures of Tobacco Smoking vs E-Cigarettes (Nicotine Vaping)

Edward F. DOMINO Dept. of Pharmacology, University of Michigan, USA

SS5-2 HEAT-NOT-BURN PRODUCTS : WHAT DO WE KNOW TODAY? A RISK/BENEFIT ANALYSIS

Manuel PEITSCH PMI R&D, Philip Morris Products S.A., Switzerland

SS5-3 Measuring the potential reduced risk character of tobacco heating and vaping products

Sarah COONEY Scientific R&D, British American Tobacco (Investments) Ltd, Southampton, UK

SS5-4 Vapor-infused tobacco, a low-temperature intermediate between directly-heated tobacco and e-electronic cigarettes?

Ian W. JONES JT International SA, USA

■ Discussants: 横光 健吾 (立命館大学総合心理学部)

アルコール依存症治療の新展開—飲酒量低減の実践—

座長：宮田 久嗣 東京慈恵会医科大学精神医学講座

『新アルコール・薬物使用障害の診断治療ガイドライン』（2018年版）によると、アルコール依存症の治療目標として断酒が第一選択（最も確実な治療選択肢）であり、重篤な身体的・精神的合併症がある場合、重大な社会生活障害がある場合、重症な離脱症状がある場合などには断酒が推奨される。しかし、患者が断酒に応じない場合に、治療からの脱落を避けるための過渡的な選択肢として、“飲酒量低減”が治療選択肢として正式に採用された。あるいは、明確な合併症がないなどのより軽症な場合には、最初から“飲酒量低減”が治療目標になるとされている。

本シンポジウムでは、この新しい治療選択肢である“飲酒量低減”の位置づけ、断酒との使い分け、治療の実際、治療成績などについて、アルコール依存症治療を専門とする医療機関（病院、クリニックなどの）の立場から解説いただき、討議したいと思う。

SS6-1

都心の専門クリニックにおける飲酒量低減治療（減酒外来）の実践

倉持 穰 さくらの木クリニック秋葉原

SS6-2

一般精神科クリニックにおけるアルコール依存症治療のアドラー心理学（Individual Psychology）に基づく薬物療法

田中 禎 ただしメンタルクリニック

SS6-3

東北会病院での減酒治療について

奥平富貴子 東北会病院

New Developments in the Treatment of Psychotic Spectrum Disorders

座長：岩田 仲生 藤田医科大学医学部精神神経科学講座

SS8-1

**Beyond dopamine (DA) D₂ antagonism:
Targeting other neurotransmitter receptors and neurotrophins to treat the *triad*
of pathology of the schizophrenia phenotype**

Herbert Y. MELTZER Department of Psychiatry, Northwestern University Feinberg School of
Medicine, USA

SS8-2

The Role of Emerging Technology in Mental Health Care

John M. KANE The Zucker Hillside Hospital, New York, USA

ニコチン研究の最前線：新たな精神作用を求めて

Frontier of Nicotine Research: In search of novel psychopharmacological effects

オーガナイザー・座長：廣中 直行 株式会社LSIメディエンス薬理研究部 / 帝京大学文学部心理学科
座長：宮田 久嗣 東京慈恵会医科大学精神医学講座

ニコチン性アセチルコリン受容体を介する神経情報伝達は、感覚、運動、情動、認知など多岐にわたる生体機能調節に重要な役割を果たしている。近年、この受容体を構成するサブユニットの構造と機能の解析が進み、その知見が新たな疾患モデル動物の開発やヒト脳機能イメージングなどの進歩と相まって、ニコチン研究は新たな局面を迎えている。そこでは基礎研究として重要な知見が蓄積される一方、気分障害、統合失調症、パーキンソン病や認知症などの神経精神疾患に対する新たな創薬の可能性も生まれている。そこで、本シンポジウムではこの研究領域で目覚ましい成果をあげている第一線の研究者による最新の研究成果を学び、基礎・臨床両面にわたる研究の可能性について討論を深めたい。

SS9-1 紙巻たばこ及び加熱式たばこを使用した時の生理心理的効果

本井 碧 九州大学大学院芸術工学研究院デザイン人間科学部門

SS9-2 ドライビング・シミュレータを用いたニコチンの認知・運動機能に関する研究

西川 典子 国立精神・神経医療研究センター病院脳神経内科

SS9-3 難治性うつ病モデルマウスにおけるニコチン性アセチルコリン受容体賦活化の改善効果

森口 茂樹 東北大学大学院薬学研究科薬理学分野

SS9-4 喫煙がパーキンソン病発症率を低下させる機構への腸内細菌叢の関与の解明

大野 欽司 名古屋大学医学系研究科神経遺伝情報学

ADHDの適正診断

座長：齊藤 卓弥 北海道大学大学院医学研究院児童思春期精神医学分野
近藤 毅 琉球大学大学院医学研究科精神病態医学講座

「精神疾患の診断と統計の手引き」はDSM-IV-TRからDSM-Vへと改定され、成人期ADHDの診断に配慮される形となった。同時に多数のコホート調査の結果から、Late-onset ADHDという概念が出てきており、小児期との連続性に対して異論が唱えられている。こうした考えは、成人期での診断において小児期の症状の存在確認の必要性の軽視につながる可能性があり、過剰診断への懸念が存在する。また、内因性や心因性といった病因にかかわらず、慎重な鑑別診断が行われることなく、安易にADHDという診断がなされる可能性も存在する。本シンポジウムでは、そうした過剰診断に繋がるケースに焦点をあて、適正なADHDの診断がどうあるべきかを考えていきたいと思います。

SS10-1

小児期ADHDの適正診断

小野 和哉 聖マリアンナ医科大学神経精神科学教室

SS10-2

「一般身体疾患による注意散漫や衝動性」の可能性を考慮する：ADHD診断上の留意点

尾崎 紀夫 名古屋大学大学院医学系研究科精神医学・親と子どもの心療学分野

SS10-3

小児期ADHDから成人期ADHDへの繋がり

小坂 浩隆 福井大学医学部病態制御医学講座精神医学

嗜好品科学の現在と未来 — ハーム・リダクションは嗜好品科学を変えるか —

The present and the future of Shikohin (pleasure products) science: Clinical contribution of harm reduction

オーガナイザー：宮田 久嗣 東京慈恵会医科大学精神医学講座
 座長：廣中 直行 株式会社LSIメディエンス薬理研究部 / 帝京大学文学部心理学科
 高田 孝二 帝京大学文学部心理学科

アルコール、コーヒー、たばこなどの嗜好品は、古来から人間の生活に深く密着し、気分転換、リラクゼーション、人間関係の円滑化などの役割をになってきた。一方で、その精神面への好ましい効果(報酬効果)から嗜好性、依存性に関連し、過剰な摂取は、心身に悪影響をもたらす側面もあった。加えて、近年は、IT技術の発展にともない、ギャンブル性の高いゲームが未成年にも容易に利用可能となり、また、高カフェイン飲料が問題となっている。このようななかで、嗜好品の有益な効果(ストレス緩和、リラクゼーションなど)を維持し、依存性や心身への悪影響を最小限とするために、ハームリダクションの手法が導入されるようになった。具体的には、非燃焼たばこ、低アルコール飲料、低リスクギャンブルなどである。このような手法が、嗜好品の適正使用に有効であるのか、脳科学、認知心理学などの観点から検討することが本シンポジウムの目的である。

SS11-1 たばこのハームリダクション

廣中 直行 株式会社LSIメディエンス薬理研究部 / 帝京大学文学部心理学科

SS11-2 酒類の香りの精神的効用

好田 裕史 サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社

SS11-3 1円パチンコは、ハームリダクションとして有効か

横光 健吾 立命館大学総合心理学部

SS11-4 魅惑的な甘い味の嗜好食品におけるハームリダクション：
砂糖を人工甘味料に置き換えることの効果

青山謙二郎 同志社大学心理学部